

# 清末小説から 143

2021.10.1

吳禱漢訳ル・キュー『薄命花』——柳川春葉「虚無党の女」の原作………沢本香子 1

吳禱漢訳『新魔術』………神田一三19

母我漢訳プーシキン「棺材匠」——アリンスン英訳………樽本照雄26

『露漱格蘭小伝』のこと………沢本郁馬30

包天笑漢訳クレイ「古王宮」——涙香訳『古王宮』の原作………荒井由美33

商务印书馆编译所编辑甘永龙的翻译实践………王 玉、梁 艳40

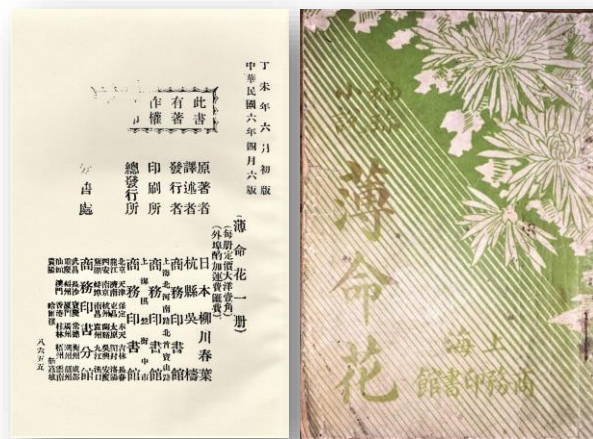
清末小説から29、32、47

★吳禱漢訳についての論文が続きます。紹介されるべき業績です。次号も掲載を予定してい

清末小説研究会 日本〒520-0801 滋賀県大津市におの浜2-2-5 212号 樽本照雄方

吳禱漢訳ル・キュー『薄命花』  
——柳川春葉「虚無党の女」の原作

沢本香子



影印本奥付 孔夫子旧书网から表紙

日本柳川春葉原著、杭県吳禱訳述『薄命花』  
(上海・商務印書館 丁未(1907)年六月初版/中華民國六(1917)年四月六版 袖珍小説。影印本を使用)について述べる。

185頁)は吳禱の翻訳作品に『薄命花』があると記述するのみ。それが阿英目録(1954/1957)では以下のとおり詳しくなっている。

薄命花 且 柳川春葉著。吳禱訳。光緒三十三年(一九〇七) 商務印書館印。164頁

先行文献——底本確定のむつかしさ

阿英『晚清小説史』(1937、281頁/1955、

阿英は実物を見て目録を作成した。だから

『薄命花』は柳川春葉原著だと書くことができる。ただし春葉の作品名までは記載しない。阿英は小説に記載された基本情報のみを抽出して目録を編集したからだ。言いかえれば原作あるいは底本探索までする余裕がなかった。誤解のないように注記すれば阿英目録が刊行されたこと自体が大きな成果だった。だからこそ研究者は長年にわたって使用してきたのだ。

それ以後、底本探索は困難状態に陥る。清末の翻訳研究は外国語の関係で底本探索を進めにくい。特に日本語がからむと困難度が高まる。中国には日本語を理解する研究者が少ないことが理由のひとつかもしれない。別の側面を見れば漢語を理解する日本の研究者で清末民初小説に興味を持つ人も多くない。

基本的には刊行物そのものが問題だ。『薄命花』を見るのがむづかしい。よく知られているようで作品の入手が容易ではなかった。

放置できない。なんらかの情報を追加したくなる。だが実際に着手すれば簡単なことではないことがわかる。

中島利郎は次のように書いた。[中島76B-83]袖珍小説叢書<柳川春葉(専之1877-1918)訳とあるが、邦題、原作共に未詳>\*1。

調べても「未詳」とせざるを得ないくらい春葉の作品は数が多いということだろうか。春葉作品が不明であればその原作をさぐる糸口さえ行方不明だ。

昔の文献を持ち出して申し訳ない。それだけ言及されることが少ないという事情をご理解いただきたい。また中島の該目録初稿が「2」で中断したのは次の書籍にすべてを注入したからだと推測する。

中島が資料協力をしたという阿英著、飯塚朗+中野美代子訳『晚清小説史』(1979)\*2には少しの加筆がある(傍点筆者。以下同じ)。

注(56) 『薄命花』柳川春葉(一八七八～一九一八)原作の『生さぬ仲』(一九一三)

か。光緒三十三年(一九〇七)商務印書館刊 374頁

『生さぬ仲』と具体的に書名を出したところが新しい。ただし「か」をつけて疑問を残す。確認できていないことを意味する。見れば『生さぬ仲』の公表は1913年としているではないか。『薄命花』はそれに先行する1907年刊行だから時間的に矛盾が生じる。杜撰である。中島が書き加えたようには見えない。

そこに気づいたのは呉燕(2010)\*3だ。『薄命花』について注19をつけている。

19) 阿英『晚清小説史』の訳者飯塚明と中野美代子の見解によると、『薄命花』の日本語底本は柳川春浪の『生さぬ仲』であると言う。[飯塚明、中野美代子訳、『晚清小説史』、『東洋文庫』1979年、頁374] そうだとすると、中国語訳の出版年代は日本語原作より早くなるが、それは間違いとしか思われぬ。樽本照雄の『新編増補清末民初小説目録』の中では、この小説について、日本語原作の作者名しか示されていない。翻訳年代と呉構の作品選択の傾向から判断すれば、柳川が明治三十八年以降創作した『薄情者』、『やどり木』を代表とする家庭小説の中から選ばれた可能性が高いのではないかと。28-29頁

『生さぬ仲』については呉燕の指摘が当たっている。また『新編増補清末民初小説目録』(樽目録第3版 済南・齊魯書社2002。46頁)も同様だ。ただし呉燕が示している「薄情者」(『新小説』1905)、『やどり木』(1906)にしても「ないか」と書いて可能性を述べただけ。底本の確定がないからもどかしい。『薄命花』そのものを欠いた状態では正解に到達しないのもしかたがない。

目録類を見れば『薄命花』は明らかに1冊の

単行本である。もとの春葉作品も相当な分量があるに違いない。それが思い込みのひとつもなっていた。『生さぬ仲』『薄情者』『やどり木』などという作品があげられたのもその予測にもとづいてははずだ。すべてが未解決のままである。問題を解決するためには書物そのものが不可欠だ。

そういう情況で新しい示唆があった。米国 Xilao LI が Yanagawa's A Nihilist Lady と示している(2007)。それを手がかりにして樽目録第4版(2011)より「柳川春葉「虚無党の女」『太陽』10巻11号1904.8.1か」と注釈欄に追記した。「か」と示した理由は単純で『薄命花』を見ていないからだ。

李艶麗「晚清日語小説翻訳書目録(1898-1911)」(2014)\*4はさらに一歩進めている。『薄命花』(光緒三十三年)にもとづいて粗筋を紹介したのが斬新だ(155頁)。しかしそこに注釈をつけて「日本語原作には言及しない[不涉及日文原作]」という。

『薄命花』は該書うしろの「晚清日語小説翻訳書目録(1898-1911)」にも掲げてある。

12.《薄命花》, 吳禱訳, 上海商務印書館 1907/ (日) 柳川春葉著《虚無党の女》, 《太陽》10巻11号, 1904.8.1? 170頁

雑誌『太陽』の刊行年月に「?」をつけている。漢訳は確認したが春葉日訳は見えていないという意味なのか。単なる誤植なのかは不明だ。

書影とともに漢訳本文の一部分を引用紹介しているのが付建舟『清末民初小説版本経眼録・日語小説巻』(2015)\*5である。大いに役立つ。

付建舟が掲載するのは袖珍小説の2種類だ。「光緒三十三年六月初版/同年十月再版」には訳述者を銭塘吳禱とする。もうひとつは「丁未六月初版/中華民国六年四月六版」で杭県吳禱と記す。初版10年後の中華民国になってからも重版された。人気があったことがわかる。

阿英『晚清小説史』(1937)から付建舟著作(2015)までざっと78年が経過している。春葉から吳禱への翻訳経路は判明した。しかし具体的な内容の解明にはいたっていない。さらにいうならば春葉作品は翻訳だがそのもとづいた作品についても不明のままである。

### 角書「科学小説」の謎

筆者は2020年になって『薄命花』の影印本を入手した。いくつかの疑問を解決する入り口に立ったということだ。

該書を見れば分類名の「袖珍小説」は表紙に記載されている。商務印書館は「袖珍小説」という部門を設定しているからそのうちの1作品だ。参考までにほかの部門には「欧美名家小説」「説部叢書」「林訳小説叢書」「小本小説」などがある。

ところが『薄命花』のどこにも角書「科学小説」がない。以前はその角書があると思っていた。

もとづく資料がある。版元商務印書館の広告(1911)だ\*6。

「袖珍小説」の部に『薄命花』を収録する。書名上部に割注で「科学小説」と表示しているのがわかる。これが角書だ。ほかの作品にもすべて角書がついている。作品の実物を見ることができなければ版元の表示を信じるほかない。阿英目録はもとから角書そのものを採録しないのが編集方針だ。参考にすることはむづかしい。

実際には(影印本が実物のままとして)その記載はなかった。念のためにほかの袖珍小説複数を見た。いずれも個別に角書はついていない。商務印書館の編集者が図書総目録を作成した時、そこにはない角書を勝手に付加したらしい。ただし「科学小説」としたのは編集者なりの考えがあったのだろう(後述)。

ついでにいえば商務印書館の刊行物、特



に重版奥付に表示する初版の刊年が間違っていることがある。事実ではない数字を記載するのだ。図書館総目録の角書についてもそれと同じことがいえそうだ。書物を確認する機会が増えればこのような例がほかにも出てくるものと思う。

角書など細かなことだと疑問を持つ人もいるだろう。気にしない研究者が多い。しかし問題は小さくない。実物を見て目録を作成しているかどうかがあぶりだされるからだ。ひとつひとつ確認する作業を続ける必要がある。

### 呉構漢訳とその底本——柳川春葉

漢訳『薄命花』の底本は柳川春葉「虚無党の女」（『太陽』10巻11号1904.8.1）である。



「虚無党の女」本文 表紙

春葉作品は雑誌掲載が2段組みでわずかに全13頁だ。それを漢訳してどうして単行本1冊になるのか。不思議だった。呉構訳の影印本を見てようやく理解できた。

袖珍と称するだけあって小型本らしい。「らしい」というのは実物大に影印したようには見えないからだ。手元の書籍は全体を拡大した印象がある。全57頁。しかも1頁が21字×10行で合計210字にすぎない。

商務印書館の袖珍本系列で『三疑案』（丁未年九月初版/中華民国二年十一月三版）は23字

×11行の253字だ。また呉構訳『五里霧』も同様である。だが『銀鈕碑』は22字×11行の242字であって不揃いだ。すると『薄命花』を含めて袖珍本系列は判型は統一されていても組版の定型はないということになる。

結果として『薄命花』はゆったりと活字を組んだから1冊になった。あるいはその逆で単行本にするためにゆるくページを設計した。

それに比較して同じ商務印書館の「小本小説」は小型本だが30字×13行で1頁当たり390字もある。また「説部叢書」初集、2集が32字×12行の1頁は384字だ（全部が一致しているとは限らない）。そこを見れば『薄命花』は贅沢な意匠が与えられた。なぜ特別扱いなのか。単にページ数の関係なのかその理由はわからない。

呉構が日本に渡って学んだという資料はない。主として日本語翻訳作品から漢訳しているから彼が日本語を理解しているのは事実だ。この『薄命花』もそのひとつである。呉構は中国で日本語を学習したと考えられる\*7。

底本の著者柳川春葉（本名専之、1877-1918）は紅葉門下の家庭小説作家で知られる。小学校卒業後、一時期英語塾に通ったことがある。

春葉は外国文学にも関心を持っていた。それを紹介する文献から引用する（割注は開いた）\*8。

彼（春葉）は当時流行の北欧や西欧の文学に関心をもって、ツルゲーネフの「車輪の響」（「新潮」明治三九・三・二五）、モーパッサンの「農夫の娘」（「新潮」明治四〇・一・一五）、イブセンの「蘇生の日」（梁江堂刊 明治四三・二・五）などの翻訳、翻案もこころみ、……（後略）47頁

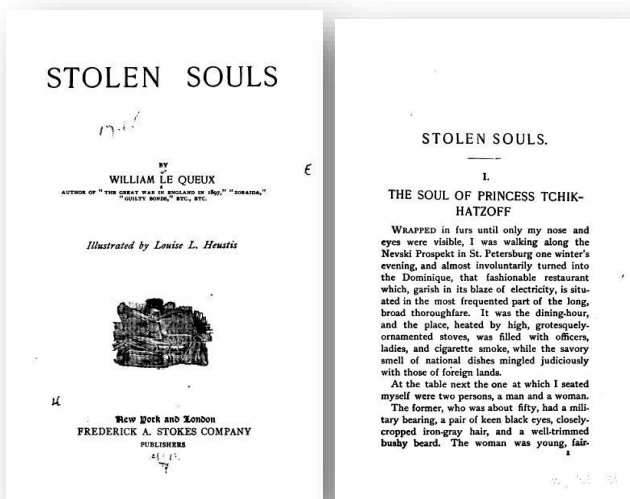
上に見る外国作品は春葉の経歴から考えれば英語訳からの重訳だろう。

ロシア文学に関心をもつから翻訳して「虚無党の女」があるとは思う。ただし春葉の該作品

に言及する日本と中国の研究論文を見かけない。もちろん目録類は除く。李艶麗の説明は例外的な存在だ。

原作——ル・キュー

春葉が使用したのはル・キュー (William Tufnell Le Queux, 1864-1927) “Stolen Souls [盗まれし魂]” (New York and London: Frederick A. Stokes company, 1895. open library 所収) である。



扉

本文

短篇小説集で全14篇を収録している。春葉はそのうちの第1章(篇) “The Soul of Princess Tchikhatzoff [チカツオブ公爵夫人の魂]” のみを日訳して題名は「虚無党の女」とした。

それをさらに呉禱が漢訳して『薄命花』である。「美人薄命」の「花」だからいずれも女性を指す。といっても早死にするわけではない。英文原作の固有名詞から日訳の普通名詞になり漢訳では抽象的な題名に変化している。

ル・キューの題名「チカツオブ公爵夫人の魂」から想像できるのはロシア人が登場していることくらいだ。そこから虚無党を想像することはむづかしい。だから春葉の日訳「虚無党の女」はル・キューの作品内容をうまく抽出しているといえる。そこから呉禱『薄命花』に飛躍する

のは訳者の主観なのだから別にいいだろう。しかし『薄命花』を見ただけでは虚無党が関係しているとはわからない。虚無党小説を論じる論文で言及されることがない理由だと思う。

商務印書館の図書総目録に角書「科学小説」を付加していた。編集者が苦心した結果ではなかろうか。虚無党が出てくるから「政治小説」あるいは「虚無党小説」とする方法もあった。しかし編集者は内容が虚無党ではなく催眠術を主としていると把握した。しかし当時も「催眠術小説」という分類はない。それではあまりに特化しすぎる。ならば「医学小説」でもいいようなものの商務印書館はその角書は使用したことがない。催眠術ならば「科学小説」に含まれてもいい。そういう理由だと思われる。それにしても漢訳題名が『薄命花』という女性を示しながらなおかつ「科学小説」というのだから違和感がある。しかし作品を読めば納得はするだろう。

一人称小説の主人公はイギリス人ウエントウォースである。彼はロンドンの日刊新聞通信員としてロシアの首都サンクトペテルブルクに滞在していた。彼が党员だというのではない。ロシア虚無党に同情する記事を書いたことがある。その後も時々呼ばれて秘密集会に参加していた。互いに利用価値があるという関係であった。

彼はレストランでアガフィアという女性の隣席にたまたま座った。それ以後、彼女のことが忘れられなくなるという不思議な感覚を持つようになる。その理由は物語最後に明かされる。虚無党の秘密集会に出てみるとその女性が組織加入の宣誓を行なっている。それ以来、彼女との不可解な出会いが続く。彼女からコレラ患者となった前恋人に手紙を渡してほしいという願いがありそれを実行してもいる。

イギリスに帰国しロンドンで馬車の中のアガフィアを見かけた。ウエントウォースは殺人事件に巻き込まれ意識を失って放置されていたのを友人のファーガスン医師(催眠術大家)に助



けられる。ふたりが追究するとアガフィアが彼女の後見人デアノフ（催眠術師、虚無党員、実は露国政府の走狗）によって催眠術をかけられていたことが判明する。アガフィアは悪漢の思うがままに操られていたのだった。悪人の催眠術師デアノフの目的はアガフィアが相続したチカツォフ公爵の財産を横取りすることだ。目的は成功したが彼自身は宮殿に爆弾を仕掛けたときにそれを取り落した。自爆死してしまい自業自得で終わった。そういう物語である。

春葉日訳題名の「虚無党の女」は小説内容を示している。ただし虚無党そのものについて詳細に説明する作品ではない。主題は催眠術のほうにある。催眠術をかけられたアガフィアとウエントウォースの身边に不可解な事件が起こることが主要な内容だ。虚無党は背景に設定されているにすぎない。遺産の横取りに男女の恋愛模様風をからめる。催眠術が重要な役割をはた

しているとくり返す。

呉禱が翻訳したチェーホフとゴーリキーの作品とは作風がまったく違う大衆小説である。

### 春葉と呉禱の翻訳

春葉の日訳はル・キュー英文のほぼ直訳になっている。段落まで同じだ。「ほぼ」というのは春葉の加筆がわずかにしてもあるからだ。

加筆に関してまず細かいところから指摘する。1例を示す（ルビ省略）。

チカツォフ公爵夫人（アガフィア）についてル・キューは衣装と持ち物に注目して説明した。関係部分のみを抽出する。

a velvet *shuba*, lined with Siberian fox  
/the *bashlyk* …… of Orenberg goatwool  
p.2

ビロードのシュバ（外套）、シベリア狐の裏地／オレンベルグ山羊の毛でできたバシユリク（頭巾）

物語がはじまるのはロシアだ。雰囲気を出すためにロシア語を、ただし英語表記の *shuba*、*bashlyk* を使用した。装飾が高級品であることを示して裕福な女性であることを読者に伝えている。英語圏の読者がシュバ、バシユリクをそのまま理解したかどうかはわからない。前後関係で推測させるという作者の意図なのだろう。オレンベルグ Orenberg は Orenburg とも。地名だ。モスクワから南東にカザフスタンとの国境に近いウラル山脈の南端に位置する。

春葉と呉禱の翻訳はそれをどのように処理したか。並置する（呉禱漢訳についてカタカナ語は春葉日訳を使用する）。

【春葉】西比利亜の狐皮の裏を付けた、天鷲絨の外套／バシユリツクは、オーレンブルヒの山羊の毛で 97頁

【呉禱】背面貼著西比利亜出産の狐皮。裳

面上又加天鵝絨外套／巴秀立克冠。乃是奧  
凌堡所出山羊的毛。3頁

裏にはシベリア産の狐皮をつけ表面はび  
ろうどの外套／バシユリツク頭巾はオーレ  
ンブルヒで産出した山羊の毛

春葉は「外套」と訳した。しかし「バシユリ  
ツク」はそのままで。呉禱漢訳は春葉日訳を直  
訳している。「冠〔頭巾〕」を付け加えたのは  
呉禱の工夫である。

たとえば原文の **revolver** を春葉は「ピスト  
ル」と翻訳した。呉禱は「披斯脱爾手槍」つま  
り「披斯脱爾〔ピストル〕」と音訳したうえで  
さらに「手槍〔ピストル〕」を並置する。二重  
手間をかけた。

日本語を読む人はすぐに理解する。このやり  
方はルビである。漢字に振り仮名をつけるルビ  
という活字文化は明治時代からある。日本で普  
通に見られるルビを呉禱は自分の翻訳に導入し  
た。上のピストルで実例を示せば「<sup>手</sup>槍<sup>槍</sup>」  
となるだろう。そのような組版の習慣がないか  
らもとのカタカナ語に意味を接続させて表示し  
た。

清末民初の商務印書館は日本金港堂と合弁会  
社だった。印刷技術を導入してその鮮明さを宣  
伝している。しかしルビ文化は普及しなかった  
ようだ。教科書に注音字母を振るのはだいぶの  
ちの中華民国時代になってからである。小説本  
文に傍点は見るとルビは知らない。

呉禱による新しい漢訳方法だった。しかしそ  
れを疑問視する人がいた。『小説林』第5期  
(1907)の「新書紹介」では次のように書い  
ている(本文のみを翻訳する)。

薄命花 商務袖珍本 定價一角  
是書訳筆。似有欠妥處。如云科滌洋盃。蘭  
泊洋灯、披斯脱爾手槍等。按杯子、西文為  
**Cuq**。訳音為科滌。訳義則盃也。灯、西文  
為 **Lamp**。訳音為蘭泊。訳義則灯也。手槍、

西文為 **Pistal**。訳音為披斯脱爾。訳義則手  
槍也。音義並列殊為鮮見\*9。

本書の翻訳には妥当ではない箇所がある  
ようだ。たとえば「科滌洋盃」「蘭泊洋灯」  
「披斯脱爾手槍」などである。「杯子〔コ  
ップ〕」は外国語で **Cuq**〔**Cup**〕という。  
音訳して「科滌〔コップ〕」でありその意  
味は「盃〔コップ〕」だ。「灯〔ランプ〕  
」は外国語で **Lamp** という。音訳して「蘭  
泊〔ランプ〕」でありその意味は「灯〔ラン  
プ〕」だ。「手槍〔ピストル〕」は外国語  
で **Pistal**〔**Pistol**〕という。音訳して「披  
斯脱爾〔ピストル〕」でありその意味は  
「手槍〔ピストル〕」だ。音と意味を並列  
するのはまことに稀である。

紹介文を書いた人が日本にルビというものが  
あることを理解していれば違った評語になった  
のではなかろうか。

また漢訳だけにたよって英語を再現した。だ  
からピストルの英文が **revolver** であるとは思  
わない。それはしかたがないだろう。

春葉の翻訳ではル・キュー原作にない小さな  
加筆がいくつかある。アガフィアが醸す高貴な  
雰囲気を描写して独自の書き加えをする。

【春葉】何から何まで、有らん限りの善盡  
し美盡したもので、従つて當人の様子は、  
何う見ても貴族らしく見受けられるのだ。

97頁

【呉禱】總而言之。這女子身上。任從那裏  
起。任到那裏止。好是天生就無瑕無疵。盡  
善盡美。當真沒一絲一毫遺憾。叫人指摘出  
來。因此上。他的體態豐度。任是誰人。總  
道他是貴族門風。斷斷不是尋常小家之女。

3頁

言ってみればこの女性はどこからどこま  
でも天性で疵がなく、善をつくし美をつく  
しており他人が指摘すべき残念な箇所がま

ったくないようだ。だから彼女の様子から貴族の家風だろうと誰でもがいうはずだ。断じて普通の貧乏人ではないのだった。

呉禱は日本語をそのまま重訳するのが基本姿勢である。上の箇所では少し説明の語句が増えたとはいえ日訳と基本的に合致している。

そればかりか呉禱の加筆は春葉日訳をこえて理解しやすい箇所がある。

ル・キュー原作で使用されるある単語に注目する。作品に出てくる Prince は公爵だし Princess は公爵夫人を意味する。春葉の日訳はこの単語についてなぜか統一していない。「姫さま」から「奥さま」までの間で揺れている。わざと多様性を示したといえなくもないが不安定にしか見えない。

Agafia Ivanovna, the Princess Tchikhatzoff  
p.10

アガフィア・イヴァノヴナ、チカツオフ公爵夫人だ。

【春葉】チカツオフの公爵、アガフィア、イワノウナ 101頁

ここは公爵夫人でなくてはならない。「チカツオフの公爵」としては春葉の誤訳になる。アガフィアは最初に登場する箇所ではアガヘアとしている。そこは誤植かもしれない。

【呉禱】梯加奥夫公爵、伊華奴烏娜 22頁  
チカツオフ公爵、イワノウナ

春葉を受け入れたから呉禱もここでは公爵と誤った。もうひとつカタカナの「チカツオフ」に見える「オ」は小書きである。今では「チカツオフ」と書くが当時は大きく表示していた。誤解するはずのない箇所だ。しかしなぜだか「オ」に引っかけり漢語の「奥」を当てた。別の作品ではそのような誤りは犯してはいない。

ここだけは呉禱の不注意だろう。現代漢語では「契卡佐夫」とすることも考えられる。

呉禱はアガフィアを漢訳しない。春葉日訳の「イワノウナ [伊華奴烏娜]」で統一した。

ル・キューにある「Princess」(p.11)を春葉は「姫さま」(102頁)とし呉禱は「夫人」(26頁)だ。呉禱漢訳が正しい。別の箇所も示す。

I recognized her features. It was Agafia!  
“You, Princess?” I cried in astonishment,  
grasping her hand. p.14

私は彼女のことがわかった。アガフィアだった。／「あなたは、公爵夫人でしょう？」私は驚いてそう叫ぶと彼女の手を握った。

【春葉】此女こそ誰あらう、寢寐にも忘れないアガフィア其人だ。／『やア、チカツオフの姫さまで——』と僕は嬉しさのあまり矢庭にその手を握った。104頁

【呉禱】唉。這女子是誰人。正是我寢寐不忘餐飯不[如]廢的伊華奴烏娜那人。我喜得不可支持。喊道。『呀。伊華奴烏娜夫人——』登即和他行握手的礼。33-34頁

アア、この人こそ誰あろう、私が寝ても覚めても忘れず食事がノドを通らないまでに思いつめたイワノウナその人である。私は喜びのあまり思わず声をあげた。「や、イワノウナ夫人——」矢庭に彼女と握手をした。

春葉の「チカツオフの<sup>ひい</sup>姫さま」では公爵の娘と誤解されかねない。呉禱の「イワノウナ夫人」は春葉よりも適正だ。

だいいちル・キュー原作ではアガフィアが自身の経緯を説明していることを見逃すわけにはいかない(下線は筆者。以下同じ)。

although only eighteen, my mother



compelled me to marry the Prince, who was nearly forty years older than myself. p.21

まだ18にしかありませんでしたが母は私に公爵との結婚を強要しました。その人は私よりも40歳近く年上でした。

【春葉】妾の母は其時には未だ十八にしかありません妾を、四十ばかりも年上の、父と申しても可いやうな、彼の公爵家に無理に嫁きましたのです。108頁

【呉禱】那時我母親。将我十八歳の女兒。嫁與一位年過四十的公爵之家。50頁

その時、私の母は18歳の女兒を40歳もこえたある公爵の家に嫁がせたのです。

ここを見れば春葉が「(チカツオフの) 姫さま」とするのが不適切であるとわかる。つぎの箇所は呉禱の加筆があるから中国の読者は正しく理解しただろう。

Especially so if one's idol is Agafia Ivanovna, the Princess Tchikhatzoff p.10

ことに相手がチカツオフ公爵夫人のアガフィア・イヴァノヴナであっては

【春葉】それに對手がチカツオフの公爵、アガフィア、イワノウナと来ては恐るべし恐るべし。101頁

【呉禱】女子的丈夫乃是梯加奧夫公爵。他自己名字。叫做伊華奴烏娜呀」22頁

女性の夫はすなわちチカツオフ公爵だ。彼女の名前はイワノウナなのだよ。

春葉日訳ではチカツオフ公爵にしかならない。アガフィアが公爵では意味が通らないと呉禱はわかっている。だから上のように「丈夫[夫]」を補充した。内容を正確に把握していることが理解できる箇所だ。

小さな異同はある。soup (p.2) を春葉はそのまま「スープ」(97頁)とし呉禱が「麵包

[パン]」(5頁)に置き換えたという箇所などだ。そほのかは省略する。許容範囲内だと考える。

### 超常現象

記者ウエントウォースはレストランでアガフィアを見かけたあとなぜかしら彼女に引き付けられるようになった。彼女が体験する肉体上の跡がウエントウォースの身体にも同時発生するという怪奇現象だ。

家にもどったウエントウォースは彼女の叫び声を聞いた。同時に右腕をねじ上げられノドにあてられた刃物の冷たさを感じる。彼以外には誰もいない室内のことだった。鏡の前に立って見た。

I saw upon my throat *a thin red line*, while upon my wrist were three red marks that had apparently been left by unseen fingers! p.8

ノドのところに細い赤い筋があり、一方で私の手首には見えない指が残した赤い跡が明らかにみつつあった。

問題は下線部分だ。春葉は省略した(春葉日訳にくり返し記号があれば文字に置き換えた箇所がある)。だから呉禱漢訳にもない。

【春葉】這は抑も如何に、細い赤い筋が丁度咽喉のところに現然と印いて居るので101頁

【呉禱】又不知為何。恰好咽喉之間。顯然印著細細一縷一縷的紅筋。19頁

なぜかはわからないがちょうどノドのところに明らかに細く赤い筋がついている。

手首に出現した赤い跡はアガフィアと結びつくことが後でわかる。ル・キューはまぎれもなくそれを重要な手がかりに設定した。これが伏

線となって次の展開になる。

I took the letter slowly from her hand, and as I did so, was amazed to discover that on her slim white wrist there were three red marks, exactly similar to those I bore! p.11

私は彼女の手からゆっくりと手紙を受け取ると、彼女の細く白い手首に私に生じたものと全く同じ赤い跡がみつつあるのを発見して驚いた。

容貌が以前とは違うように見えても手首の赤い跡がふたりに共通して残っている。ウエントウォースはそれによってその女性がアガフィアであると直感した。

しかし春葉はその部分を省略したから次の場面でも引込めたままにせざるをえない。

【春葉】快諾一番其手紙を受け取つた。而してつらづらその女の顔を見ると、扮装こそ斯くは違つて居るとは云ふものゝ、是は不思議！擬うべくもなき彼女の女、チカツオブ公爵と聞いた彼の女である。102頁

【呉禱】當即收下了他的書信。隨又看望女子的面顏。怎地這等裝扮。和往時大不相同。可不是稀奇意外的事！如今看他模樣。簡直沒得個比方。聽說他是梯加奧夫公爵夫人。更覺可怪了。26頁

彼女の手紙を即座に受け取りそのまま女性の顔を見た。その装いがどのように昔とは大いに異なっているとはいへ珍しくも意外なことでもなかった！彼女の様子を見ればまぎれもなくあのチカツオブ公爵夫人である。まことに不思議なことだった。

原作では手首の赤い跡がふたりで共通する。この怪奇現象こそは物語の謎を解くカギなのだ。なぜそこを春葉は削除してしまったのか。たし

かにふたつの場面で1ヵ月そらの時間が経過している。それだけの時間があれば赤い跡も消失しているはずだと春葉は考えたのかもしれない。しかし超常現象なのだから合理的判断は必要なかった。ル・キュー原作のままに翻訳したほうが異様で奇怪な物語世界が保持できただろうと惜しむ。呉禱は春葉日訳に従うほかない。

物語の最後部分において謎解きがある。催眠術であった。

#### 菊池幽芳『新聞賣子』および『薄命花』の広告

催眠術が登場する作品といえば『薄命花』の前には呉趺人が関与した漢訳「電術奇談」（1903）\*10がある。その底本は日本の菊池幽芳日訳『新聞賣子』（新聞連載1897/単行本1900）だ。刊行年を見れば呉禱が『新聞賣子』と『電術奇談』を読んでいたとしても不思議ではない。「虚無党の女」および『薄命花』ははかならぬ催眠術という単語でそれとつながる。

もうすこし細かく具体的に『新聞賣子』（『電術奇談』）と「虚無党の女」（『薄命花』）の接点を指摘する。

医療用具のランセットというものがある。この単語について呉禱漢訳は春葉日訳よりわかりやすく説明している。

Ferguson, who had placed his hand upon her breast, took out a lancet and made a slight incision in her arm. p.19

彼女の胸に手を当てていたファーガソンはランセット（刃針）を取り出し腕にわずかな傷をつけた。

【春葉】ファーガツソンは女の胸に手を當てゝ見て、それからランセットを取り出して、雪よりも真白な二の腕にブツツリと打込んでみて 106頁

【呉禱】法医生將手捫一捫他的胸前。姑且試驗。隨又在身辺取出蘭色忒試驗葉管。颯的打入他賽過霜雪樣白的兩條玉腕之中

44-45頁

フアーガツソン医師は彼女の胸をすこし押ししてみた。それからランセット試験葉管を取り出して雪よりも真っ白なふたつの腕にスーと打ち込んだ。

ランセットとは外科用器具である。先の鋭くとがった両刃のメスだ。あるいは刃針、穿刺針などという。ランセットをそのまま示した春葉訳では読者は何のことかわからない。前後から判断してなんらかの道具であると推測はできるが。

呉禱は「蘭色忒 [ランセット]」にその意味の「試験葉管」を追加した。以前に説明したルビあつかいである。それが読者には親切だという考えだ。そこはいいにしても呉禱は日本語の「二の腕」が理解できなかった。漢語では「上膊」という。「両條」では「二本の」腕にしかならない。小さなところで誤訳をする。

このランセットという単語で『新聞賣子』（『電術奇談』）と「虚無党の女」（『薄命花』）がつながる。

【幽芳『新聞賣子』】利一は失望の極  
ランセット  
 披針を掴み来りて泰蔵が腕の常脈を切断しぬ、死せる人ならずば鮮血さつと迸ばしるべきを濃き黒ずみたるどろどろせる濃血の僅かに一滴ぼたりと落ちたるのみ。33頁

上のランセット（披針。細い刃針）は相手の生体反応を見るために使われた。『薄命花』でも同じ役割をはたしている。

幽芳訳『新聞賣子』（『電術奇談』）では物語の発端に催眠術が登場する。主人公の裕福な青年（インド帰り）が友人の操作する電気機械によって催眠術をかけられ覚醒せず記憶を失う。そればかりか身体に異常を発生し別人になって新聞の売り子になった。そこから日訳題名は命名された。単行本の前編表紙にはその後姿が描



前編 表紙

かれている\*11。

ただし作品名をみただけではこれが催眠術をあつかった小説だとは気づかない。そこで大阪毎日新聞は事前に啓蒙記事を掲載して小説発表の準備をした。

『大阪毎日新聞』1896.11.30「催眠術の伝授」から引用する（ルビ省略）。

始めて催眠術を発見したるは独逸の理学者メスメルと云へる人にて其方法は極めて簡単なるもにてありき則ち重に動物に対し其額を打ち又は目の前に指を綾なして眠らしむるに過ぎりき而して此方法をば発見者の名を附してメスメリズムと称したり今日の催眠術即ちヒプノチズムは畢竟此メスメリズムの進化したるものなり／＼一たび催眠術をかけられたる人は己の知れる事ならば如何なる事をも命ぜられたる儘に行ふ可し

フランツ・アントン・メスマル（メスマーとも。Franz Anton Mesmer、1734-1815）はドイツ人医師。動物磁気によって患者を治癒させることを提唱した（メスマリズム mesmerism、動物磁気療法）。これが催眠術（ヒプノティズム hypnotism）につながる。

催眠術によって他人の意識と肉体を操作する側面を強調して書かれているのがル・キュー「チカツォフ公爵夫人の魂」である。前述のとおりノドに発生した赤い筋、見えない手によって手首に赤い印がつけられる箇所がそうだ。

催眠術を強調して押し出したのが幽芳の翻訳小説である。幽芳「催眠術 小説「新聞賣子」を掲ぐるに就き」（『大阪毎日新聞』1897.1.1。単行本では文章題名から「催眠術」を削除し掲載を二月一日に誤る）が掲載された。「催眠術則ちヒプノチズムがメスマリズムなる名の下に始めて世に顕はれしは今より百年前の事なるが」と書いて催眠術が医学界、心理界、教育界などに起こすだろう大改革について述べる。そのなかの医学、心理における働きについて説明する2ヵ所を引用する（傍点ルビは省略。句点をほどこす）。

或は五厘銅貨を肌に触れて其銅貨と同じ形の隆起を生ぜしめ十字架に触れしめては十字形の隆起を生ぜしむるを得可し。殊に甚しきは一言の命令を以て手を触れず刀を触れずして身体に出血せしむるを得可し。

催眠術の心理上に及ぼす結果については実に慄然たるものあり。催眠術を施されるものは施術者の命ずるまゝに如何なる事をもなす可し。

幽芳の解説は彼の『新聞賣子』よりもル・キュー作品に適合例を見ることができる。

さて呉禱の『薄命花』はその題名からは虚無党あるいは催眠術が出てくるとはわからない。ただしその新聞広告は露骨なまでの種明かしを

している（記号は陳大康による）。

[編年史③1306] 『時報』光緒三十三年七月初十日（1907.8.18）「上海商務印書館続出最新六種小説」

《薄命花》：此是叙俄国党人岱拉那夫以動物電気佩伊華奴烏娜之身，使之無端恐懼，所以待伊者至酷，攫其資，紡（繼）而欲絶之。遇拯獲生，而岱卒以行刺自斃。事頗悲兀，所謂讀之動魄回腸者，其此種稗史耶？洋装一冊，精製袖珍抄本，每冊定価大洋一角。（注：[編年史⑤2457]も同文）

『薄命花』：ロシア虚無党员デアリアフがイワノウナに動物電気をかけて限りない恐怖に落とし込む。イワノウナをひどく扱うのはその財産を奪いつくすためだ。彼女は偶然救われデアリアフは自分で死んでしまう。事件はひどく痛ましい。いわゆる読めば驚き感情が高まるというその種の小説であろうか。洋装1冊、上製袖珍本、定価大洋1角。

人名は春葉日記を使用して訳した。「動物電気」とは催眠術を指す（後述）。『薄命花』では催眠術が使われる。ただ1ヵ所だけ出現する「動物電気」を広告のために取り出したのは文案者が興味を感じたからだろう。

もともと推理的要素をそなえた小説だ。ところが新聞広告は小説を最後まで読んでようやく明かされる事実を晒してしまった。大筋をすべて書けばいいというものではない。そこが広告を書いた版元商務印書館の編集者には理解できていないようだ。そういう常識のない時代だったとしかいいようがない。

**謎解き**——鍵語としての催眠術（メスマリズム、動物電気）

催眠術について登場人物で専門家のファーガスンが解説するという形をとっている。そこを

見ていこう。便宜的に数字を振る。

① “She remembers nothing distinctly since she was hypnotized,” Ferguson said, “therefore you are a stranger. p.19

「彼女は催眠術をかけられてからまったく何も覚えていない。だから君のことも知らないのだ」とファーガスンは言った。

【春葉】ファーガツソンは僕に向つて、『この方は催眠術を施されたのです。其以来皆無夢中で、何事も記憶して居らんです、夫で君を見知らんのだ。』 107頁

春葉はル・キュー原作どおりに直訳しているところが呉構は奇妙な漢訳をした。どうみても誤訳である。

【呉構】只聽法醫士對著我道。『我用的是催眠術方法。凡是以前的事並非如夢寐之中。全然忘却。不論什麼事。都能記憶著。因此。他還能認識老兄』 46頁

ファーガツソン医師が私に向かつていうのをただ聞いていた。「私が用いたのは催眠術という方法です。以前のことはけっして夢の中というわけではないのだがまったく忘れていて。なにごとであれ記憶をすることはできる。だから彼女は君を見分けることはできるのだ」

呉構漢訳の奇妙なところは「忘れていて」のに「記憶をすることはできる」と矛盾しているからだ。

さらに呉構は日本語「この方」を「我」と取り違えた。「施された」という受け身を理解していない。それ以後の漢訳が日訳とは反対になった。アガフィアがウエントウォースのことを「見知らんのだ」とするのが春葉日訳だ。ところが呉構は「還能認識老兄〔見分けることはできるのだ〕」と解して逆である。

もうひとつは日本語漢字を勘違いした。

春葉日訳「其以来皆無夢中で」の「皆無」は日本語では「すべて」という意味だ。「まったく夢の中で」記憶がない。そう自然につながる。

ところが呉構は「凡是以前的事並非如夢寐之中〔以前のことはけっしてすべて夢の間というわけではない〕」と漢訳した。そうした理由は春柳の「皆無」という漢字に引っぱられたからだ。呉構からすれば漢語で「皆無」ならば「全無」「毫無」「完全没有」と読める。それが呉構訳の「非」になった。続く文章が日訳とは反対になってしまった原因である。

このあとでアガフィア自身が説明している。それがあってもかかわらず誤解をした。不可解だといわざるをえない。

I seem to have been in a long dream; I can remember nothing distinctly. p.20

私は長い夢の中にいたようで何もはっきりとは覚えていません。

【春葉】妾は只今まで全く夢の心地で何も明瞭と覚えて居りません。107頁

【呉構】我至今還全然如在夢中。不論什麼事。總不能明白清醒。48頁

私は今にいたるまでまるで夢の中にいるようになにごとであれはっきりとは理解できないのです。

明らかに呉構漢訳のファーガスン医師の説明とは食い違っているのではないか。どうして前後で一致させなかったのか理解するのはむづかしい。

呉構が理解する日本語は基本的にかなり深いと筆者は理解している。春葉日訳にくらべてわかりやすい翻訳上の工夫をしているところからそれがわかる。しかし上の例のように日本漢字に引かれて誤解を生じている箇所があることも事実なのだ。呉構は書物だけを頼りに日本語を学習したのではないかと推測する理由である。

②Ferguson, who was one of the greatest English authorities on hypnotism and a student of the occult, eagerly asked what the man had done. p.20

ファーガスンは催眠術についてイギリスの最も偉大な権威のひとりでありオカルトの学究だったからあの男が何をしていたかを熱心に尋ねた。

【春葉】此ファーガツソンと云ふ男は、英国で一二と云はれる催眠術の大家であるので、其デリアノフなるものゝ為たところを、詳細に女に語らしめた。107頁

【呉禱】可知法軋遜医士那人。在英国之中原是頭等有一無二の催眠術名家。他見女子道出魔術兩個字来。將岱拉奴夫所作所為的情形。仔仔細細解說。告訴女子。47頁

ファーガツソン医師という人は英国で唯一無二といわれる催眠術の大家である。彼は女性が魔術という2文字を話したからデリアノフが行なったことを彼女にむかって仔細に説明した。

ここも呉禱の誤訳である。「女に語らしめた」が命令形であることを呉禱は理解しなかった。ひらがなについての理解に弱点がある。

次の部分は催眠術の核心を説明している。ファーガスンは主人公の眼を見つめて言った。1行ずつ比較対照して検討する。

③The man has experimented successfully upon you with the novel method of producing hypnosis recently discovered by Charcot at La Salpêtrière. p.20

その男はシャルコーがサルペトリエールで発明した新しい催眠術法を君にうまく実験してみたのだな。

【春葉】うむ、その男は旨く君に成功したのだ、ラ、サリペトリエールで、近頃シャル

コーの発明した催眠術新法が。夫を其デリアノフと云ふ男が君に試験し居つたのだよ。107頁

【呉禱】唔。那人要在老兄身上。成他的功。近来名人蝦爾科。發明一種催眠術新法。名叫獵薩利拍特来。岱拉奴夫那厮。却要借老兄来試験試験。48頁

うむ。その男は君の身体でうまくやったのだ。近ごろシャルコーという人が催眠術新法を発明したのだがそれをラ、サリペトリエールという。デリアノフというあいつが君にちょっと試験したのだよ。

ジャン＝マルタン・シャルコー (Jean-Martin Charcot, 1825-1893) はパリのサルペトリエール病院の医長で神経学者。ヒステリーの治療に動物磁気(催眠術)を適用して成果をあげた。パーキンソン病の命名者としても知られる。

春葉は人名シャルコーと病院名サルペトリエールを区別している。それを呉禱は新技術の名称だと誤解した。

Remarkable as it may seem, it is, nevertheless, possible to transfer by suggestion the sensibility of hysterical subjects to any liquid. p.20

それはどうやら驚くべきことにヒステリー性てんかん患者の感性をどんな液体にも暗示で転移することができるようだ。

【春葉】シャルコーの説明に依るとだ、ヒステリー患者に其感覚を盡く流動体の中に乗り移つたと思はせることが出来ると云つて居る。107頁

【呉禱】據蝦爾科所說。能將害希斯忒里病的人。遍身知覺情感。一齊搬移到各樣流質之中。48-49頁

シャルコーの説明によるとヒステリー患者全身の知覚情感をすべて流動体のなかに

運びこむことができるという。

ウエントウォースがレストランで知人を見かけて中座したことがあった。その際にデリアノフはワイングラスに指を突っ込みアガフィアの意識をワインに注ぎ込んだというわけ。そこからウエントウォースとアガフィアの意識下における連帯ははじまった。睡眠術をかけた結果の現象だという説明だ。

On drinking the wine, you absorbed her sensibility, and her very soul thus transferred to you, produced the mysterious affinity of thought and deed. p.20

ワインを飲むことによって彼女の感性を吸収し彼女の魂が君に移って思考と行動の不思議な親和性を生み出したのだよ。

【春葉】其乗り移った酒を君が飲んだので、即ち此の方の感覚を君の体中に吸収してやったのだ。107頁

【呉禱】那人搬到老兄喝的酒裏。就是将這位娘子知覚情感。吸收到老兄身体之内。49頁

君が飲んだ酒のなかにその人は乗り移った。そこでこの女性の知覚情感は君の体内に吸収されてしまったのだ。

呉禱は直訳している。

The very singular coincidence of the marks upon your wrists, and the curious magnetic force that impelled you towards her, are nothing more than demonstrations of the powerful psychical influence of the mind on the body. pp.20-21

君の手首のマークの非常に奇妙な偶然の一致と、君を彼女に駆り立てた不思議な磁気力は身体にやどる心に向けての強力な心理的影響を表示するものに他ならない。

【春葉】夫れだからして君と此方との間には、其後思想と行為の不思議な親和が行はれたので、君が知らず知らず此方の方へ引き寄せられるやうに成つたと云ふのも、全く其結果に過ぎなかつたのだ。107頁

【呉禱】因此上老兄和娘子兩人。後來思想行為。奇奇怪怪的併做一堆。非常親熱。老兄不知不覺。自然親近到這位娘子一邇來。原來全然是這個緣故啊。49頁

そのため君とこの女性との間には後に思想と行為が不思議に一致して非常に親密になったのだ。君は知らず知らずのうちに自然とこの女性の方に近づいたのはもともとからまったくそういう理由だった。

原作にある手首の跡を春葉は省略した。ゆえにその超常現象は呉禱漢訳にも存在しない。それ以外は一致する。

④ The scoundrel was an accomplished hypnotist, p.21

その悪党は熟練した催眠術師で

【春葉】デリアノフと申しますのは大層催眠術が上手でして、108頁

【呉禱】岱拉奴夫那人。原來是催眠術的高手。51頁

デリアノフというものは元來催眠術の名手でした。

呉禱による直訳である。

⑤ His irresistible power of fascination I was unable to withstand, and by hypnotic suggestion he has caused me to hand over to him the greater part of my fortune. p.22

彼の否応もない幻惑の力を私は撃退することができませんでした。そして催眠術の暗示によって私の財産の大部分を彼に引き渡すことになったのです。

【春葉】然う斯う致して居りますうちに彼の動物電気とやらいふものを妾に掛けましたのでございませう。妾は理由も無く唯デリアノフが怖く成つて参りました。 108頁

【呉構】他又将一件東西。名叫動物電気。佩在我身上。我無縁無故。忽地懼怕岱拉奴夫起来。 52頁

彼はさらに動物電気というものを私の身体にかけました。私は理由もなく突然にデリアノフが怖くなってきたのです。

下線をほどこした春葉日訳部分はル・キュー原作とは異なっている。催眠術をかけられて財産を横取りされた。そこを省略してデリアノフに対する恐怖に置き換えた。春葉の誤解か、あるいは別の意図があってそうしたのか。そこはわからない。

春葉は突然「動物電気」を持ち出した。それまで「催眠術」だったのをアガフィアはなぜ別の「動物電気」にしたのか。呉構は日本語を理解している。そこで「動物電気」を生かしながら「催眠術」とは別物のように区別した。原文のアガフィアが言うそのままを忠実に漢訳したことがわかる。

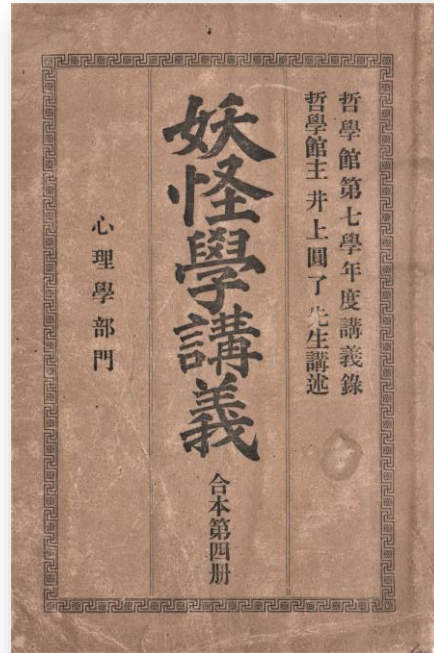
ル・キュー原作は「hypnotic suggestion [催眠暗示]」となっている。催眠術である。

春葉が「動物電気」を使用したのは明治時代にそう称していたことがあるからだ。動物の体内には電気がある。その力を利用すれば病氣治療に効果を発揮する。使電者がメスメリズム（催眠術）を使い受電者（患者）に電気を伝える。そこから他人の意識を操縦するまでに至る。医学から心理学への変化だ。春葉は当時の用語を翻訳に持ち込んだ。ただしそれまでは催眠術を使用していたから別の単語「動物電気」が出現して呉構は困惑しただろう。

メスメルは「動物磁気」と称していた。磁気と電気は異なるがアメリカを経由して日本に伝

えられる過程で一体化したらしい。

日本で早い著作は鈴木万次郎訳述『動物電気概論』（1885）<sup>\*12</sup>がある。あるいは井上圓了『妖怪学講義』巻5（1894）<sup>\*13</sup>の「第4講 心術篇 第39節（動物電気論）」から該当箇所を引用する。



他人の媒介或は技術によりて精神上に変動を与へ、或は外界に奇怪を現する事に関して説明を与へんとす、近年西洋に於て動物電気の論大に行はれ、催眠術の如きは其原因を動物電気に歸し、此種の術を称して動物電気と謂へ、蓋し此名称を与へし所以は、催眠術の如きにありては、一人か他人の精神思想を動かし、其行為挙動を自由に左右することを得るか故に、其状宛も電気の磁針に於けるに類するより、動物電気と名くるに至りしものなり、故に動物電気とは今日謂ふ所の催眠術にして、此種の術を総称するときは鬼神術と云ふ 276頁

催眠術＝動物電気という等式である。別の箇所では鬼神術に「スピリチュアリズム [spiritualism]」



とルビを振る。

井上圓了著書の部分を漢訳した蔡元培の訳作がある。蔡元培訳『妖怪学講義録総論』(1906)\*<sup>14</sup>だ。しかし「巻1総論」部分のみである。目次に「動物電気」は見えるがそれだけ。該当箇所は漢訳されていないから内容を知ることはいない。

当時の蔡元培は革命活動のひとつとして知人に毒薬爆薬の研究製造を命じている。また暗殺の道具として催眠術を使うことができると認識していた。その蔡元培が創設した愛国女学において呉禱は歴史、地理、音楽の教科を担当していたのも事実だ\*<sup>15</sup>。呉禱が催眠術の出てる作品(本作と『新魔術』1907)を漢訳したのは蔡元培からの影響があったのではなかろうか。

動物電気は春葉にとっては普通の言葉だった。しかし呉禱に動物電気についての知識があったかどうかは不明だ。呉禱は基本的に春葉の日本語をそのまま漢訳している。春葉の日本語を見て呉禱が催眠術の別名が動物電気だと推測したとしてもおかしくはないだろう。

以上、細かい箇所をあげた。結局のところ呉禱漢訳が上質の口語訳であることに間違いはない。

#### 補 足——未確認作品

葛威廉著、楊心一訳『虚無党軼事』があるという。原作は WILLIAM TUFNELL LE QUEUX “STOLEN SOULS” と表示されるが刊行されたかどうかは不明だ。

また『新聞報』に「虚無党軼事」を副題にした翻訳小説が複数掲載されている。現在筆者は該新聞を見るができないからここでは触れておくだけにする。興味のある人は目録で調べてほしい。 ☐

#### 【関連文献】

中村忠行「晩清に於ける虚無党小説」『天理大学学

報』第85輯 1973.3.21

中村忠行「清末探偵小説史稿——翻訳を中心として(2)」『清末小説研究』第3号 1979.12.1。

ル・キューの説明あり

榎内裕子「硯友社文学に見られるツルゲーネフ受容の様相——柳川春葉の場合」『ロシア語ロシア文学研究』第27号 1995.9.1

陳 建華「“虚無党小説”——清末特殊的訳介現象」『華東師範大学学報(哲学社会科学版)』1996年年第4期

一柳廣孝『催眠術の日本近代』青弓社1997.11.30

エティエンヌ・トリヤ(Etienne Trillat)著、安田一郎+横倉れい訳『ヒステリーの歴史』青土社1998.5.10

森川登美江「清末小説点描5——ロシア虚無党を描いた小説」『大分大学経済論集』第51巻第6号 2000.3.20

張 全之「從虚無党小説的訳介与創作看無政府主義對晚清小説的影響」『明清小説研究』2005年第3期(総第77期) 2005発行月日不記

泉谷安規「理論と実践のはざまにおかれた文学作品——モーパッサンの幻想小説をよむための試論」弘前大学人文学部『人文社会論争(人文科学篇)』第18号 2007.8.31

李 艷麗「「日本」の可能性 冷血作品を解説する試み」『年報地域文化研究』第13号2009年 東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 2010.3.31

——「晩清俄国小説訳介経路及底本考——兼析“虚無党小説”」『外国文学評論』2011年1期 2011.2

——『晩清日語小説訳介研究(1898-1911)』上海社会科学院出版社2014.8 国家对外文化交流研究叢書

詹 宜穎「虚無党小説的跨境旅行——關於“Strange Tales of a Nihilist”英、日、中三個版本的考察」『東亞觀念史集刊』第13期2017.12.1 未見

文 娟「試論吳禱在中国近代小説翻譯史中的地位——以商務印書館所刊單行本為研究視角」『明清小説研究』2018年第4期(総第130期) 2018.

10.15

荒井由美「呉禱についての文娼論文」『清末小説から』第133号 2019.4.1

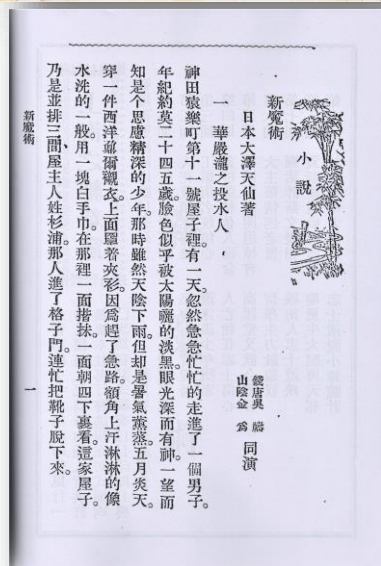
【注】

- 1) 中島利郎「晩清の翻訳小説——華訳日文小説編年目録初稿」2 関西大学大学院文学研究科院生協議会『千里山文学論集』第16号 1976.10
- 2) 阿英著、飯塚朗+中野美代子訳『晩清小説史』平凡社 東洋文庫349 1979.2.23
- 3) 呉燕「『燈臺卒』をめぐって」『清末小説』第33号 2010.12.1
- 4) 李艷麗「晩清日語小説翻訳書目録(1898-1911)」『晩清日語小説訳介研究(1898-1911)』上海社会科学院出版社2014.8
- 5) 付建舟『清末民初小説版本経眼録・日語小説巻』北京・中国致公出版社2015.1. 249-251頁
- 6) 商務印書館「商務印書館出版図書総目録」『東方雑誌』第8巻第1号 1911.3.25。またこれより先行する次もある。『商務印書館書目提要』宣統元年(1909)年九月改定7版。「袖珍小説(の部)/科学小説 薄命花 一角/俄国党人以動物電気佩伊華奴烏娜之身、使之無端恐懼而攫其資、忽遇拯獲生、而党人卒以自斃」(付建舟『晩清民営書局発行書目』上冊 哈爾濱・黒竜江教育出版社 2016.12. 209頁)
- 7) 樽本「書家としての呉禱」『清末翻訳小説論集(増補版)』清末小説研究会2017.1.15 電字版所収。以下同じ。「呉禱の漢訳チェーホフ」、「呉禱の漢訳ゴーリキー」
- 8) 大塚豊子、山田みよ子、磯貝多恵子「(柳川春葉) 一生涯、二著作年表、<sup>三</sup>[三]業績」昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書 第18巻』昭和女子大学光葉会1962.3.1
- 9) 『小説林』第5期 丁未七月。該雑誌影印本ではこの「新書紹介」を削除する。[編年史⑤2458]は「光緒三十三年八月十五日」として日付けが一致しない。また原文英語の誤植を説明なく正している。資料の扱い方法としては不適切だ。
- 10) 初出は日本で刊行されていた漢語雑誌の『新小説』だ。(日)菊池幽芳氏原著、方慶周訳述+我仏山人(呉趺人)衍義+知新主人(周桂笙)評点「(写情小説)電術奇談(一名催眠術)」24回、『新小説』8号-2年6号(18号) 光緒29.8.15(1903.10.5)・刊年不記[光緒31.6]である。単行本は複数種刊行された。関連する論文は次のとおり。  
樽本照雄「呉趺人「電術奇談」の原作」『清末小説論集』日本・法律文化社1992.2.20  
樽本「呉趺人「電術奇談」の方法」同上  
樽本「呉趺人訳「電術奇談」余話」『清末小説探索』日本・法律文化社1998.9.20  
樽本著、陳薇監訳「呉趺人《電術奇談》の原作」『清末小説研究集稿』中国済南・齊魯書社2006.8  
姜小凌「明治与晩清小説転訳中的文化反思——從《新聞賣子》(菊池幽芳)到《電術奇談》(呉趺人)」『文化研究』第5輯 2005.5  
松田郁子「「電術奇談」翻案から『情愛』改作まで——清末における恋愛小説試作」『関西大学中国文学会紀要』第29号 2008.3
- 11) 菊池幽芳「新聞賣子」75回(『大阪毎日新聞』1897.1.1-3.25)。のち単行本、『新聞賣子』大阪駈々堂、前編1900.9.12/1901.1.20三版、後編1900.10.30/1901.1.20再版。単行本2冊の口絵は尾竹国式画
- 12) 鈴木万次郎訳述『動物電気概論』十字屋・文明堂大売捌 1885.7。国立国会図書館デジタルコレクション所収。国会図書館の記述は「メスマー著」とする。誤りだろう。ネットを検索するとジョン・ボヴィー・ドッズ(John Bovee Dods、1795-1872)の著作であるという。該書について張邦彦は次のように書いている。「此書假託梅斯爾原著、実則摘録自美国催眠師多茲(John Bovee Dods、1795-1872)的著作」。張邦彦『精神的複調:近代中国的催眠術与大衆科学』台湾・聯経出帆事業股份有限公司2020.4. 41頁
- 13) 井上圓了『妖怪学講義』巻5 心理学部門 哲学館1894。国立国会図書館デジタルコレクション。また『妖怪学講義』合本第4冊 心理学部門 1896.6.14増補再版

- 14) 蔡元培訳『妖怪学講義録総論』上海・商務印書館  
丙午(1906)年八月初版/中華人民共和国七年九月六版。孔夫子旧書網に写真あり。1920年2月七版の影印本がある(上海文藝出版社1992.3)。また高平叔編『蔡元培全集』第1巻 北京・中華書局1984.9に収録する。
- 15) 樽本「書家としての呉禱」『清末翻訳小説論集(増補版)』清末小説研究会 電字版。679頁

## 呉禱漢訳『新魔術』

神田 一三



影印本

呉禱漢訳「新魔術」について述べる。ただし筆者の手元にある作品掲載雑誌は影印本だ。奥付はあつたりなかったり。かろうじて第1、2期の目次に刊年を記述する。それ以外は不明だ。発行年月日については2次資料から引用して補う。本稿で示す略号については樽目録第13版(2021)を参照してほしい。

### 漢訳「新魔術」

(日) 大沢天仙著、金為+呉禱(禱)合演  
「(科学小説) 新魔術」は雑誌『新世界小説社報』に連載されたあと単行本(1907、未見)になった。後の単行本については言及のある論文、目録から引用して注に示す\*1。

雑誌初出は呉禱を「呉禱」と誤植する。著訳者名などは初回のみ掲載だ。雑誌では訂正されることはなかった。また雑誌連載時には角書はつけられていない。

合演とある。呉禱は日本語を理解するから漢訳の実行者だろう。金為(鶴笙)の役割についてはよくわからない。金為は英語原作を漢訳している(『新恋情』1906)。また彼の名前は呉禱の別作品に出ていることはある。ただし人物の詳細は不明。

呉禱漢訳の底本は大沢天仙(興国)『催眠術』

(文禄堂書店1903.12.1 国立国会図書館デジタルコレクション所収)である。

雑誌連載の状況を見る。該小説は全30(章)で構成される。日本語本と漢訳の章題を並置した。刊年は【編年③】を、章題は【付日181、183】も参照した。ページの通し番号も記す。

『催眠術』と『新世界小説社報』連載の「新魔術」

第1期(号)丙午五月廿五日(1906.7.16)、日本大沢天仙著、錢塘吳禱<sup>マツ</sup>、山陰金為同演

- (1) 華嚴の滝の水泡
  - 一 華嚴滝之投水人 1頁
- (2) 一枚の名刺
  - 二 名刺一枚 5頁
- (3) 一大疑問
  - 三 極大疑問 9頁
- (4) 飛んだ災難
  - 四 飛来災難 14頁
- (5) 学資の補助
  - 五 補助学費 19-20頁

第2期(号)丙午六月廿五日(1906.8.14) / 【編年③1057】第2期、光緒三十二年七月十九<sup>マツ</sup>日(1906.9.7)【大康18-750】同左

- 五 補助学費 21頁
- (6) 美人中の美人
  - 六 美人中之美人 24頁
- (7) 一葉の写真
  - 七 写真一集 29頁
- (8) 蒼い顔に凄い笑
  - 八 蒼然之気凄然之笑 33頁
- (9) 墮落でも
  - 九 墮落 37頁

第3期 刊年なし / 【編年③1093】第3期、光緒三十二年九月初十日(1906.10.27)【大康18-753】同左

- 九 墮落 41頁
- (10) 腸は最う腐つた
  - 十 肝腸腐敗 41頁
- (11) 慾の深い男
  - 十一 急色兒 45頁

- (12) 隣室に一人の客
  - 十二 隣室之一客 51頁
- (13) 是れも催眠術で
  - 十三 是亦催眠術 54頁

第4期 刊年なし / 【編年③1122】第4期、光緒三十二年十月二十一日(1906.12.6)【大康18-757】同左

- 十三 是亦催眠術 59頁
- (14) 母へ送る書面
  - 十四 寄母之書面 59頁
- (15) 六万円
  - 十五 六万圓 64頁
- (16) 意外の事実
  - 十六 意外之証據 69頁
- (17) 大門の非常線
  - 十七 大門之被捕 72頁

第5期 刊年なし / 【編年③1143】第5期、光緒三十二年十一月二十八日(1907.1.12)【大康18-759】同左

- 十七 大門之被捕 75頁
- (18) 白髪 of 老人です
  - 十八 白髪之老人 77頁
- (19) 無頼 of 凶賊
  - 十九 刁頼之悪賊 81頁
- (20) 男爵武内綱宜
  - 二十 武藤之分金 85-90頁

第6期 刊年なし / 【編年③1176】第6期、光緒三十三年正月十五日(1907.2.27)【大康18-760】同左

- 二十 武藤之分金 79<sup>マツ</sup>頁(ページ数を誤る)
- (21) 暗中 of 銃声
  - 二十一 暗中之槍声 80頁
- (22) 検事潮山浪夫
  - 二十二 検事潮山浪夫 84頁
- (23) 殺人強盗犯
  - 二十三 殺人之盗犯 92頁

第7期 刊年なし / 【編年③1219】第7期、光緒三十三年三月二十一日(1907.5.3)【大康18-763】同左

- 二十三 殺人之盗犯 105頁(ページ数を訂正)

(24) 感謝の涙

二十四 感謝之涙 107頁

(25) 催眠術の効能

第二十五章 催眠術之功效 111頁

(26) 本統の唾

第二十六章 本来生就之唾子 116頁

(27) 催眠術の見世物

第二十七章 親見催眠術之人 120頁

第8期 刊年なし/[編年③1242]第8期、光緒三十三年四月二十九日(1907.6.9) 畢[大康18-763]同左

第二十七章 親見催眠術之人 117<sup>77</sup>[121]頁 (ページ数を誤る。数字を補足する)

(28) 共犯者の証人

第二十八章 同犯之証人 120[124]頁

(29) 驚く可き事実

第二十九章 可驚之事実 125[129]頁

(30) 牛が淵

第三十章 牛淵 129[133]-135[139]頁

章題の漢訳はほぼ一致する。「(4) 飛んだ災難」の「飛んだ」は「とんでもない」という日本語だ。漢訳するなら「横禍」「可怕的災難」くらいだろう。それを呉禱は「四 飛来災難(降りかかって来た災難)」とした。間違いではないが日本語の漢字を頼りにしていることがわかる。

登場人物名は(20)「武内」を「武藤」に、銀行事務員「桐淵」を「相淵」(45頁)に変更したのを除いてそのままである。

雑誌連載といっても当時は作品ごとに通し頁数を振る。だからその数字が第6期と第8期において連続していないのは奇妙だ。第6期の間違いは第7期で訂正したにもかかわらず第8期で再度誤る。そうなった理由はわからない。単なる振り違いか。

天仙の原作名『催眠術』は呉禱漢訳題名の「新魔術」そのものだ。催眠術が魔術だと考えられていた時代の物語である。

天仙原作と呉禱漢訳

原作者の大沢天仙(本名興国、1873-1906)は江見水蔭門下。北海道で仏門に入る(『日本近代文学大事典』第1巻 1977.11.18. 254頁)。

伊藤秀雄『明治の探偵小説』(晶文社1986.10.25)によれば天仙の『催眠術』は涙香『銀行の賊』より影響を受けたという(19頁)。なお同書には明治28年頃に英人ブラックが催眠術公開したともある(250頁)。彼に関連して呉禱はブラック演述『車中の毒針』を漢訳したことを記しておく(『車中毒針』商務印書館1906)。

粗筋は次のとおり。

華嚴の滝に不審者の投身があったことから物語は始まる。会社の金を横領したと疑われた社員の杉浦成政が行方不明であるのと偶然一致する。妹のお若(漢訳は阿若)は心配した。2階を借りている潮山波夫(同郷で兄の友人。明治法律学校の生徒にして昼間は文部省の雇書記)は探しに行ったが無断欠勤をしたため勤めを解雇された。お若は潮山の学費を貢ぐため待合「喜久井」の女中になる。彼女に言い寄る客の原田弘文(本名は蒲原源次。催眠術師。変装名人の大盗賊)は催眠術を使いお若を自分のものにする。銀行の金庫破りも原田が催眠術をかけて他人にやらせた。彼こそがすべての犯罪の黒幕なのだった。後に東京地方裁判所検事となった潮山が事件に介入して全貌を明らかにした。お若の兄も原田の手にかかって自殺させられていたのだ。催眠術を解かれたお若は潮山と結婚して大団円となる(後述)。

会話を主体とし軽快な筋運びで読みやすい。犯罪小説に催眠術を組み合わせているところに特色がある。

一言添える。恋人の学費のために若い女性が働くという箇所は広津柳浪著、呉禱訳「美人煙草」(『東方雑誌』1906)に似ている。

冒頭部分を掲げる(ルビ省略、繰り返し記号は文字に直す。以下同じ)。

【天仙】神田猿樂町十一番地の唯在る路地を、忙しげに入つて来た男がある。齡は漸く二十四五であらう、色は日に焼けて浅黒いが、其が如何にも男らしくて、特に眼の涼しいのが際立つて好く見える、思慮の深さうな青年で、雨あがりの蒸熱い五月の天に、子ルの襯衣の上に二子の裕を着て路を急いで来た額の汗を、皺くちやな白手巾で一撫で拭いて、長屋の三軒目の、杉浦といふ家の格子戸を入つて、投げるやうに靴を脱捨てた。1-2頁

【呉禱】神田猿樂町第十一号屋子裡。有一天。忽然急急忙忙的走進了一箇男子。年紀約莫二十四五歲。臉色似乎被太陽曬的淡黑。眼光深而有神。一望而知是個思慮精深的少年。那時雖然天陰下雨。但却是暑氣薰蒸。五月炎天。穿一件西洋黛爾襯衣。上面罩着夾衫。因為趕了急路。額角上汗淋漓的像水洗的一般。用一塊白手巾。在那裡一面揩抹。一面朝四下裏看。這家屋子。乃是並排三間、屋主人姓杉浦。那人進了格子門。連忙把靴脫下來。1頁

ある日、神田猿樂町第十一号の部屋に慌ただしく入ってきた男がいる。年齢はおおよそ二十四五歳であろう。顔色は日に焼けて浅黒いが目つきは落ち着いて非凡であり、一目見て思慮深い青年であることがわかる。その時は空は暗く雨が降って蒸し暑い五月の夏の日、ネルのシャツを着て上に裕を羽織り、道を急いできたために額には汗が滴り落ちてまるで水洗いしたようなのを白いハンカチで拭きながら周りを見た。その部屋は3間並んでおり主人は杉浦という。男は格子戸を入れて急いで靴を脱ぎ捨てた。

呉禱漢訳の句読点について説明する。引用文には上に示したように句読点「。」を一字分使用した。実際には「裡」などのように傍点であって文中に「。」があるわけではない。本稿で

は便宜的に使用していると理解してほしい。

「子ル」はフランネル (flannel) のこと。襯衣と組み合わせて柔らかく軽い毛織物のシャツを指す。漢語には「法蘭絨」という表記がある。呉禱はあえて「黛爾 (ネル)」と音訳した。「二子の裕」とは双子織による縦じまの織物だ。日本独特の事物を漢訳するのはむづかしい\*2。「夾衫」を使って裏地のついた裕にした。夏の裕は季節が違うからそれだけで暑い。単衣を持たない貧しい青年だとわかる。

中から出てきたのは「色の白いふつくりとした顔の愛くるしい妙齡の娘である」。呉禱はほぼ直訳して「容華絶代。体格溫柔。原来是一位妙色芳齡的少女 (容貌は秀でており身体つきはふつくりとした妙齡の娘であった)」である。

続くのは会話だ。ふたりだけだし女性言葉で書き分ける。話し手が誰であるかわかるから天仙はわざわざ書かない。

『妾、兄さんかと思つてよ』

『未だ帰らないか』

『未だ……………!!!』 2頁

清末の小説翻訳界ではまだカッコ類を使用することは普及していなかった。話し手を明示したあとに「曰」「道」「説」などを記して会話であることを示す。それが普通のことだった。ところがこの呉禱漢訳は従来とは違う。

『呀。我只當是哥哥同來呢 (あれ、お兄さんと一緒だとばかり思つてよ)』

『怎麼。他還沒有回來嗎 (おや、まだ帰らないのか)』

『可不是ね。還沒有…… (そうなんです。まだなの……)』!!! 2頁

天仙と同じく『』を使用して会話を示す。新しい試みだ。ゆえに呉禱は会話の直前に解説した。「以下一問一答不復標出人名 (以下の一

問一答は人名を表示しない」。逆に言えば説明を必要とするくらいに新奇な表記だったということだ。新奇なだけに印刷所の職人が組版段階でカッコを植字し忘れる個所も生じた。あるいは一部では従来どおり「説」を使った箇所もある。新趣向だが全面的には統一できていないという意味である。

天仙の原文がカッコで会話して話し手を明示しない別の例を示す。言葉使い、また前後関係から間違いようがないと思う。そこを呉構は誤解するから意外に感じる。

潮山がお若の兄を探して文部省を無断欠勤した。それで免職になった場面の会話だ。念のために話者を注記する。

【天仙】『あんな役所などは、奈何だつて可いんだ』←潮山

『而して是れから先は、奈何して学校へ行らつしやるの』と、氣遣はしげに眉を顰めて訊ねた。←お若 17頁

勤めを減になったのだから学校の授業料はどうするのか、とお若が心配をして口に出した。そこを呉構は以下のようにした。

【呉構】『文部省的事。究竟怎麼樣呢（文部省のこと、どうなさるおつもりなの）』←阿若の台詞と間違う

『那個且莫管他。我且先到學校裡去一趟再講（そんなことなどはいいいんだ。まず学校へ行ってみてからの話だよ）』←潮山の台詞と間違う

ひとつは先に出てくる日本語の「奈何<sup>どう</sup>だつて」だ。これを漢語の「奈何（どうするのか）」と同じだと勘違いする。漢語の「怎麼樣」になった。それにつられて次の「奈何」は無視した。

もうひとつは日本語にある女性言葉のひらがな表記が呉構には判断できなかった。

日本の漢字に引かれ、ひらがなの微妙さに気づかない。そのふたつを見て呉構は日本語教科書によって独学したのではないかと疑う。

人物を取り違えたから天仙の日本語から離れてしまった。いうまでもないが小さな勘違いだ。大筋に影響を与えない。珍しいからここに取り上げた。それほど多くの間違いがあるわけではないことを記しておく。

それはさておき清末の印刷物でここまで改行する漢訳小説も珍しい。当時の刊行物は基本的にページに空白が生じることを嫌うからだ。前述のとおり句読点の「。」も1字分は取らせない。傍点にするのが普通だ。

日本語原文の改行、会話記号などをそのまま写そうという呉構（あるいは編集者）の努力は記号の「……」を使う個所にも見える。また印刷所の鴻文書局活版部は西洋由来の感嘆符「！」を使用する例がなかったらしく活字を持たない。「|」と「、」を合字させるという工夫も行なっている。また「？」についても造字した（8頁）。

本作における組版上の特徴は改行をほどこし会話をカッコでくくることだ。現在では当たり前だが清末の刊行物に見るのは珍しい。それでも句読点の1字分使用は実現していない。印刷界の強固な習慣までは突き崩せなかった。

改行の実際を見るために後半部分から引用する。催眠術にかけられた学生が意識もなく銀行の金庫破りを手伝わされた。手配されており巡査にとがめられてもめる場面だ。日本語原作78頁に対応する雑誌第5期の漢訳75頁である。天仙、呉構の順に示す。

【天仙】『コラ、逃げるかッ』

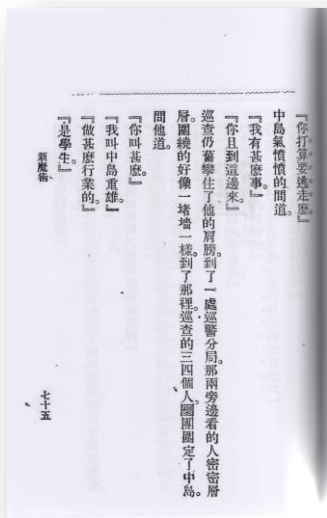
【呉構】『你打算要走麼』

【天仙】『僕に何用です』／中島は憤然として問ふた。

【呉構】中島氣憤憤的問道。／『我有甚麼事』

【天仙】『此方へ来い』

【吳禱】『你且到這邇来』



改行、カッコともに原作とおりに漢訳している。版面全体が白く見えるのがわかる。直訳だから翻訳しない。

続く説明部分にはわずかな変化がある。

【天仙】肩先を捕へた儘、五十間の派出所へ連れて行つた、続いてワイワイと人の山。巡查は三四人、中島を圍んで尋問を始めた。

【吳禱】巡查仍舊攀住了他的肩膀。到了一處巡警分局。那兩旁邊看的人密密層層。圍繞的好像一堵牆一樣。到了那裡。巡查的三四人。圍圍圍定了中島。問他道。

巡查は彼の肩をつかんだまま派出所へ行つた。その周りを見物人がびっしりと圍んでまるで垣根のようだ。そこにつくと巡查三四人が中島を取り圍んで尋問した。

この吳禱漢訳は原作の改行を無視した。「五十間」は約90mだ。「間」は中国の度量衡にはない単位だから吳禱は省略したのだろう。それ以外はほぼ直訳といっている。

【天仙】『お前の名は何ちふか、あア』

【吳禱】『你叫甚麼』

【天仙】『中島重雄』

【吳禱】『我叫中島重雄』

改行してセリフをいう形態も吳禱は忠実に写した。改行だけ見てもこの吳禱漢訳はゆったり組んでいるのが目立つ。少しの引用だが吳禱の漢訳姿勢がよくわかると思う。

大団円を引用する（下線は筆者）。

【天仙】芝明舟町に門構の家を借りて、水いらずの夫婦暮は、検事潮山浪夫とお若とである、其家庭の睦じさは、人も羨むほどである。144頁

【吳禱】當時就在芝明舟町的地方。借了一所大宅子。辦了喜事。配成夫妻。從此以後。檢事潮山浪夫和他的夫人阿若。兩口子琴瑟的和諧。閨房的樂事。家庭的雍睦一直到如今。人都欽慕稱贊他。可見婚姻自有前定。原田宣告了死刑。也是善惡到頭終有報。人又何苦像原田枉做壞人呢。 135頁

芝明舟町に邸宅を借り結婚式をあげて夫婦となった。それ以後、検事潮山浪夫と彼の夫人お若はふたりとも仲睦まじく、閨房の楽しみ家庭の穏やかで睦まじさは今に続いており人も羨むほどである。婚姻は以前から決まったものであったことがわかる。原田は死刑を宣告され。これも善惡は結局のところ報いがあるということだ。原田のようにわざと悪人になる必要もない。

天仙原作を直訳しただけでは不足すると考えた。吳禱は因果応報（下線）部分を付け加えた。

#### 催眠術

天仙原作は催眠術を基本に置いて構成されている。だからこそ題名が『催眠術』なのだ。

潮山波夫が催眠術についてお若に説明する。その一部を引用したい。天仙「(26) 本統の唾」



とそれに対応する呉禱「第二十六章 本来生就之唾子」である。

【天仙】これは今から三百年ばかり前に、独逸の医者メスメルといふ人が、此法を發明したから、最初はメスメルズムといった、其れより次第に研究されて、技術も非常に進歩し、今ではヒポノチズムといつて、盛に西洋で流行してゐる。121頁

【呉禱】這是三百年前。有一個法国医生。名字叫做麦斯麦魯。發明出来的。起先就用他的名字。叫這個法兒做麦斯麦魯入。隨後次第研究。這個法術非常的進歩。現在又替他起個那兒。叫做黑坡挪基入。西洋各国到處盛行了。116頁

メスメルズムは「麦斯麦魯入」、ヒポノチズムは「黒坡挪基入」だ。日本語カタカナの「ム」は漢訳して「入」で統一したとわかる。

ドイツ人のメスメルを呉禱はなぜだかフランスの医者(法国医生)に変えた。誤解だ。それ以外は直訳になっているから翻訳しない。

催眠術を利用した実験についていろんな例を述べる書物がある。井上圓了『妖怪学講義』合本第4冊(心理学部門 哲学館1896.6.14増補再版)などで紹介があるのは周知のことだろう。天仙も先行する書物から借用している。

【天仙】独逸にアルベルト、モールといふ人があつた、此人が五十三歳の婦人に催眠術を施した事がある、其時、婦人の両手を高く上げさせて、お前さんの手は最う下らないのだと言つて、首肯かして置いてから、手を下へ垂げて御覧といふと、垂げやうと思つて、其婦人は、一生懸命に力を入れたが、奈何しても手は垂がらなかつた。122-123頁

【呉禱】従前德国摩爾地方。有一個人名字叫阿東彼得。他曾經用催眠術試驗過一個五十三歲的女人。叫女人的兩隻手。高高的举

起来。他就對這個女人說道。現在你的兩隻手。可是已經不能拖下來了嗎。這個女人對他點點頭。果然兩隻手拖不下來。他又對女人說道。你如果想要把手拖下來。儘可以隨你的便。那個女人就果然毫不費力的拖下來了。117-118頁

モールという人名を呉禱はなぜだかドイツの地名(摩爾地方)にしてしまった。間違ふところではないと思う。理由は不明。

筆者が下線を施した箇所は呉禱による加筆である。訳せば「彼はさらに婦人に言った。あなたが手を下ろしたいと思うのであればそうできます。その婦人は果たして力をまったく入れることなく下ろした」となる。施術者の言うがままになると強調したかったらしい。それら以外は直訳だからこちらでも翻訳しない。

この実例は次の書籍に掲載されてもいる。竹内楠三『(学理応用)催眠術自在』(1903)<sup>\*3</sup>の「第2編 第9章 催眠術の実例」第2例に見える。

次は余(モール)が五十三歳の婦人に試験を施したのである。(中略)余は婦人の手を持ち上げた、元の通り高く上がつて居る。そこで余は婦人に、「お前の手は下がらないのだ」と言い聞かせて置いて、自分で手をおろして見よと命じたが、婦人は力を入れて其れをおろさんと努むるけれども、どうしても下げることは出来ないで、手は矢張り元の通り高く上がつて居た。56-57頁

天仙の作品以前に催眠術の実例を説明する著書が複数で存在したものと思う。

呉禱漢訳「新魔術」(雑誌1906-07/単行本1907)の重要な構成要素は催眠術だ。催眠術といえど同じく呉禱漢訳『薄命花』(1907)<sup>\*4</sup>がある。呉禱が同時期に漢訳したふたつの作品が催眠術を主題としているのもおもしろい。催

眠術に興味を持っていたとわかる。

それとは別に、日本語表記のとおり改行を施し、カッコを使用して発話部分を括る新しい試みを呉禱が実行したことは高く評価されてもいい。 罫

【注】

- 1) (日) 大沢天仙著、山陰金為+錢塘呉禱合訳『新魔術』30章 上海・新世界小説社

【編年③1248】標“科学小説”、光緒三十三年(1907)四月出版[大康18-875]同左。四月但日期不詳

【編年③1462】再版、光緒三十四年(1908)正月出版

【付日181】表紙奥付写真あり。奥付は訳述者：新世界小説社記者、光緒三十四年正月初旬再版/光緒三十四年正月中旬発行。説明して版權頁署新世界小説社光緒三十三年(1907)正月初版とする

- 2) 日本の「袴(はかま)」は漢訳して「外衣」に、「火鉢(ひばち)」は漢語の「風扇」(3頁)に変えた。「五所紋の縞の羽織」は紋付の縞(ろ)だから夏用の羽織だ。呉禱はこれを「一条用五緒綵絲織成的羽緞兵児帯」(25頁)と5色の糸で織りあげた羽二重の兵児帯にする。地名の「日暮里(にっぽり)」を文章だと考えて「斜日衡山」(46頁)と漢訳した。暮れかかる日が山に隠れようとしているという意味だ。長文の手紙を見て「忠臣蔵よろしくといふ長文句」(62頁)とは義士のひとり大高源五が母親にあてた書状を指す。それを「俗語説得好。真人不露相(俗語でいう、能ある鷹は爪隠すだ)」(59頁)と漢訳した。
- 3) 竹内楠三『(学理応用)催眠術自在』大学館1903.3.5。国立国会図書館デジタルコレクション所収。また googlebooks 所収。1903.3.5/4.8三版
- 4) (日) 柳川春葉著、杭県呉禱訳『薄命花』上海・商務印書館1907.6/1917.4六版 袖珍小説。底本は柳川春葉「虚無党の女」『太陽』10巻11号1904.8.1。原作は WILLIAM TUFNELL LE QUEUX, “THE SOUL OF PRINCESS TCHIKHATZOFF (チカツォフ公爵夫人の魂)” (短篇集 “STOLEN SOULS” NEW YORK AND LONDON: FREDERICK A. STOKES COMPANY, 1895 所収)

母我漢訳プーシキン「棺材匠」

——アリンスン英訳

樽本照雄

雑誌初出

母我漢訳プーシキン「棺材匠」は日本語になおせば「葬儀屋」だ。原作についてはすでに渡辺浩司の指摘がある。それを含めて雑誌初出は以下のとおり。なお母我は陳无我(无我)だと筆者は考える。

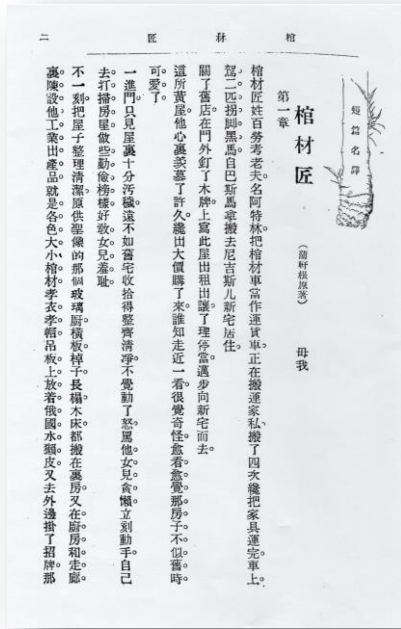
蒲軒根原著、母我訳「(短篇名訳)棺材匠」  
『小説時報』第17期 1912.12.1  
PUSHKIN 著(渡辺浩司) Александр Сергеевич Пушкин (Aleksandr Sergeevich Pushkin) “ Повести покойного Ивана Петровича Белкина (Povesti pokojnogo Ivana Petrovicha Belkina)” 1831 中の “Гробовщик (Grobovschik)”

本稿の目的は漢訳の底本を指摘することだ。明らかにされている原作は大いに役立つ。参考にするのはいうまでもない。

鍵語はアリンスン英訳

母我は陳景韓と共訳で作品2件を発表している。これを見れば底本まで最短の時間で到達する。

- 1 大デュマ作、アリンスン英訳、母我、



冷血(陳景韓)訳「賽雪兒」22回 『小説時報』11-13期 1911.7.30-10.6

ALEXANDRE DUMAS père 著、ALFRED RICHARD ALLINSON 英訳 “CÉCILE; OR, THE WEDDING GOWN” LONDON: METHUEN, ND (C 1910'S?)

2 プーシキン作、アリンソン英訳、母我、冷(陳景韓)訳「神槍手」 『小説時報』第13期1911.10.6

ALEXANDRE DUMAS père 著、ALFRED (RICHARD) ALLINSON 英訳 “CROP-EARED JACQUOT AND OTHER STORIES” LONDON: METHUEN & CO. (1905) 収録の STORIES FROM POUCHKIN に “A FINE SHOT” がある。

両作品ともに同じ雑誌、それも同時期に掲載された。

ここで重要なのは母我がたずさわった作品がアリンソン英訳だという点だ。母我が英訳を担当し陳景韓は修辭上の修正を加えたと考えられる。

漢訳プーシキン「棺材匠」は同じく母我の手になる。しかも『小説時報』掲載である。辛亥

革命の時代だから掲載時期に少し間があいたらしい。以前は共訳者だった陳景韓が外れて母我の単独漢訳になった。訳者が母我のみだから日本語翻訳は考慮の対象から外れる。母我漢訳が使用した日本語底本は見当たらないからだ。

### 母我漢訳の底本はアリンソン英訳

母我漢訳で掲載誌が『小説時報』、しかも英訳者のアリンソンといえばプーシキン作品は限られる。すでに「神槍手」で紹介した。

くり返すが上記 ALFRED (RICHARD) ALLINSON 英訳 “CROP-EARED JACQUOT AND OTHER STORIES” に収録された STORIES FROM POUCHKIN に以下の3作がある。“THE SONWSTORM”、“A FINE SHOT”、“THE COFFIN-MAKER”である。

“THE COFFIN-MAKER”とは葬儀屋の意味だ。これが母我漢訳「棺材匠」になったと思われる。以下で検証する。

ひとは主人公の名前だ。Адриан Прохоров は神西訳<sup>\*1</sup>ではアドリアン・プローホロフとなっている。比較する英訳はアリンソン以外では前稿と同じく3種類を使用する。注にまとめた<sup>\*2</sup>。

底本の固有名詞が漢訳にそのまま反映されると考えていい。このばあいは姓の「プロホロフ」だ。

英訳3種類の該当箇所を見る。

【TELFER】Adrian Próhoroff

【EDWARDS】Adrian Prohoroff

【KEANE】Adrian Prokhoroff

これらの英訳 Adrian は共通する。問題は姓の方だ。前2種はプローホロフとプロホロフである(参照:神西訳はプローホロフ)。【KEANE】Prokhoroff は「kh」とするから「プロコロフ」に近い。

アリンソン英訳は Adrian Prokorof と表記

してプロコロフである。微妙な個所だが英訳3種類とは表記が異なる。

母我漢訳はそれを「姓百勞考老夫。名阿特林」と発音した。当時の中国では姓名の順に置きなおすことが多い。Adrian が阿特林になるのはかまわない。また百勞考老夫は漢音でプロコロフである。アリンスン英訳のままだ。これが証拠のひとつ。

証拠のふたつ目は作中に出てくる看板だ。

葬儀屋が移転して新しい家屋に看板を出した。太ったキューピッドが松明を逆さに持った (a fat Cupid holding in his hand a torch reversed) 絵柄だという描写がある。

キューピッドは弓矢と松明を持って象徴とする。松明はそこでは愛情を表わす。それを逆さに持つということは愛情の消滅を意味する。そこから連想して生命の消失に適用した。葬儀屋の看板に使用するのそういう意図であるらしい。ロシアではそれが普通の看板なのかどうかは知らない。

神西訳では『白木及び色塗り霊柩の販売並びに飾付け。賃貸及び古棺修繕の御需めにも応ず』(130頁)と訳される。棺桶の種類が示されている。白木と色塗りが基本だ。それぞれに飾りのありなしが選択できるというわけ。

しかも看板の説明は地の文に引き続き改行なしである。英訳3種類も同じく改行されない。改行を問題視するのはアリンスン英訳はそれをしているからだ。

参考のために看板の文句を英訳3種から引用する。

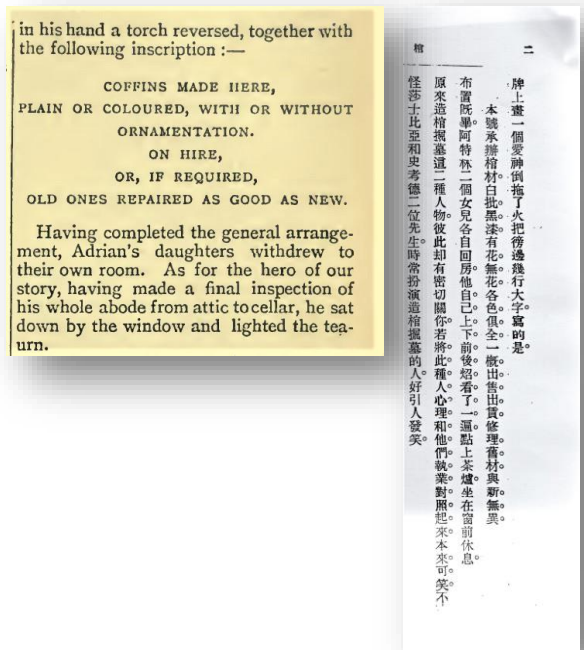
【 TELFER 】 Here are sold and ornamented plain and painted coffins; coffins also let out on hire, and old ones repaired.

【 EDWARDS 】 Here coffins are sold, covered, plain, or painted. They are also let out on hire, and old ones are repaired.

【 KEANE 】 Plain and coloured coffins sold and lined here; coffins also let out on hire, and old ones repaired.

英訳上の2例は同じ理解だ。棺桶には基本的に飾りあり、白木、色塗りの3種類があるという。【KEANE】は白木と色塗りの2種類のみ。前出の神西訳を見れば白木と色塗りに2分しそれぞれに飾りありなしの選択肢があった。もとの合計4種類が3種か2種になっている。そこが異なる。あとの貸し出しと修繕を宣伝するのはほぼ同じだ。当時のロシアには棺桶を貸し出す習慣があったらしい。

ところがアリンスン英訳は以上とは違う訳になっている。まず看板の文句を改行する。



これは英訳3種が地の文章に続けた組版とは同じではない。

COFFINS MADE HERE、／棺桶あります  
PLAIN OR COLOURED, WITH OR WITHOUT / 白木または色塗り、  
ORNAMENTATION. / 飾りのありなし。

ON HIRE, /貸し出し  
OR, IF REQUIRED, /あるいはご要望により  
OLD ONES REPAIRED AS GOOD AS NEW./古棺を新品同様に修繕いたします。

アリンスン英訳では棺桶の基本は2種類で飾りのありなしを選択する。

母我漢訳を見れば看板の文句部分そのものが地の文から切り離されて1文を形成している。細かい改行はないが独立しているのが共通する。

本号承辦棺材。白批[皮]黒漆。有花無花。各色俱全。一概出售出賃。修理旧材。与新無異。  
棺桶あります。白木または黒色、飾りのありなし。すべて売り出し貸し出し、古棺を修繕すれば新品同様です

直訳と言っていい。

念のために日本語訳も見ておく。

魚住衛訳「葬儀屋」(1910)\*3は母我の漢訳「棺材匠」に先行する(ルビ省略)。

「普通棺、塗棺、各種販売、装飾、貸棺、並に古棺修繕も仕候」49頁

看板の簡単な字句ではあるがやはりアリンスン英訳とは違う。特に「装飾」を別項目にしたのが決定的だと思う。

母我漢訳「棺材匠」はアリンスン英訳を底本とする。これが結論だ。 ☐

【注】

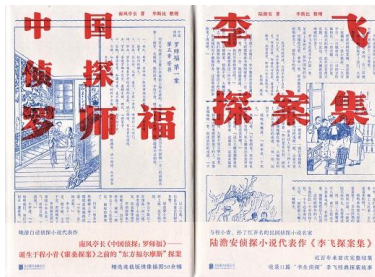
- 1) プーシキン作、神西清訳「葬儀屋」『スペードの女王・ペールキン物語』岩波文庫1967.5.16/2010.5.25第5刷。略号【神西】
- 2) 次のとおり。冒頭に英訳者の姓を示す略号を置く。

【 TELFER 】 ALEXANDER SERGUEVITCH POUCHKIN 著、MRS. J. BUCHAN TELFER 英訳 “ THE UNDERTAKER ” ( “ RUSSIAN ROMANCE ” LONDON: HENRY S. KING & CO., 1875)

【 EDWARDS 】 ALEXANDER SERGUEIEVITCH PUSHKIN 著、MRS. SUTHERLAND EDWARDS 英訳 “ THE UNDERTAKER ” ( “ THE QUEEN OF SPADES AND OTHER STORIES ” LONDON: CHAPMAN & HALL, 1892)

【 KEANE 】 ALEXANDER SERGUEIEVITCH PUSHKIN 著、T. KEANE 英訳 “ THE COFFIN-MAKER ” ( “ THE QUEEN OF SPADES AND OTHER STORIES ” LONDON: CHAPMAN & HALL, 1892)

3) 魚住衛訳「葬儀屋」『帝国文学』第16巻第8号 1910.8.1



陸澹安著、華斯比整理○『李飛探案集』北京聯合出版公司2021. 3

超荅狂著、華斯比整理○『胡鬧探案』北京聯合出版公司2021. 3<BR>

南風亭長著、華斯比整理○『中国偵探羅師福』北京聯合出版公司2021. 3

劉半農著、華斯比整理○『劉半農偵探小説集』北京聯合出版公司2021. 5

## 『露漱格蘭小伝』のこと

沢本 郁馬



↑ 孔夫子旧书网

### はじめに

信陵騎客訳『露漱格蘭小伝』はイギリスを舞台とした物語だ。漢訳を読むことはできる。しかし原作、原作者、訳者ともに詳細はわかっていない。

冷紅生(林紓)の「序」がある。林紓は該文において共訳した自分の『椿姫』について言及する。だが『露漱格蘭小伝』の原作が何かについて説明しない。また漢訳者の「自序」にも原作品、原作者に関する情報開示は皆無だ。信陵騎客名の漢訳作品は該作以外には見つからない。探索が困難である理由である。

林紓が「序」を書いているから清末ではよく知られた作品だと思う。複数の書店から刊行されている。目録を見れば普通学書室(1902)、支那新書局(1903、影印本あり)、文明書局(1904)、科学書局(1909)などがある。ただし私が見ているのは支那新書局の影印本1冊のみ。

孔夫子旧书网に写真がある。奥付は繙訳者：信陵騎客、発行所：上海・支那新書局、光緒二十九年四月発行と記載される。

本稿ではそれと同一版の影印本(奥付なし)を使用する。[付二407]に奥付写真が収録されているものと同じ版本だ。

本稿では内容を簡単に紹介するにとどめる。

あるいは筆者が知らないだけで有名な作品であるかもしれない。ご教示をいただければ幸いだ。

### 小説のあらまし

原作が不明だから固有名詞は原則として漢音から推測される読みにならざるをえない。正確ではないことを先におことわりする。

書名の露漱格蘭(ルース・グランド)は美女の名前である。露漱についての物語を意味するから確かに重要な人物だ。彼女がいなければ小説自体が成立しない。ただし一貫して物語の中心に存在して行動するかといえばそういうわけでもない。

先にいえば彼女に関する秘密が本書の根幹を構成する。登場人物のひとりが失踪してしまう。その友人が行方不明の彼を探していくうちに露漱自身が秘密を抱えていることが明らかになる。彼女の過去が行動の背後に大きく横たわっているのだった。

最初は関係があるとは思えないふたりの人物だ。それが後半では結びついていく。その謎解きのために事実を追求して探偵役をはたすのが洛勃忒(ロバート)という男性だ。

つまり本書には探偵小説の要素がある。とはいえ格闘とか暴力場面はない。ただ皆無ではな

く枯れ井戸に突き落とすとか放火によって負傷者は出る。露漱は最後に精神病院へ送られる。その部分は悲劇だがそれで終わらない。失踪したと思われた男性はニューヨークで英気を養っていた。また準主人公洛勃忒が結婚をする。敢えて分類するならば悲劇的推理小説あるいは悪女を中心とした探偵恋愛小説である。

## 内容紹介

物語はイギリスの地方で始まる。

医者道生(ドースン)は奥特留という場所に居住していた。男爵の名前が地名になった地域だ。道生は娘のために家庭教師を雇うことにして新聞に募集広告を出す。それに応募してきたのが露漱格蘭という美女だった。地元の男爵は10余年前に妻を失っていた。その男爵が露漱をみそめて後妻とした。

話はふたつに分かれる。

喬治太保(ジョージ・ダイバー)が登場する。陸軍の兵士で駐屯先において貧乏な美女海倫(ヘレン)を娶る。父親は怒り喬治を勘当した。一方で喬治は妻とイタリアへ旅行して金が尽きると帰国する。その後は災難続きだ。ロンドンでも失敗し入水自殺を考えるが思いとどまった。妻子を残して3年半の間オーストラリアで金掘りに従事する。2万ポンド分の金を掘り出しこれで生活ができると帰国した。ところが偶然目にした新聞の死亡欄に妻の名前があるのに気づいた。彼は精神的に不安定な状況に陥った。

喬治が妻の死去を知った時に友人と一緒にいた。洛勃忒(ロバート)である。弁護士で伯父は男爵だ。男爵が後妻に露漱を娶ったので屋敷から足が遠のいていた。

妻に死なれた喬治は精神的に自立ができそうにもない。そういう彼を励ますために洛勃忒は彼を連れて別の友人とともにロシアの聖彼得堡に行ったりもした。しかし帰国後は喬治の症状は元に戻る。こう紹介しながら不審な点を感じる。せっかくロシアの首都に行きながら詳細な

描写はないからだ。あるいは原作にあるのを漢訳する際に省略した可能性もある。その後、喬治は行方不明になった

喬治を探して洛勃忒は関係者たちを訪問する。ここが探偵としての動きを示す個所だ。調べた結果は衝撃的な物語だった。

男爵の後妻となった露漱は偽名であることが判明する。本名は海倫である。すなわち失踪した喬治の妻だった。

喬治がオーストラリアへ金掘りに出かけたのは生活のためだ。しかし妻子からいえば遺棄されたことになる。残された海倫は父親の元に息子を置いて求職のためにロンドンに出たという経過だ。その後改名して男爵と結婚したのだから重婚である。彼女の生活にゆとりができると露漱は父に仕送りをしながら消費生活を続けた。その生活を維持するためには帰国した夫が邪魔だ。父と共謀して瀕死の女性を海倫に仕立てて死亡後に墓を作った。喬治はその死亡記事を新聞で見て信じ込んだというわけ。

洛勃忒が調査の結果に得た事実を露漱に突きつけた。彼女はそれを認めて男爵に直接告白する。露漱の母親が精神病を患っていたのが彼女にも発症した。最後は太拉と改名させられて精神病院へ入院する。

一方、洛勃忒は捜査の過程で親しくなった喬治の妹格里拉(クララ)と結婚してスイスに住んだ。

露漱にとっては悲劇的最後になった。しかし洛勃忒と格里拉の結婚で小説の結末はなんとか大団円に持ち込んだという印象が強い。

## 新聞広告

出版元の支那新書局が広告を出した。広告記事の前半は物語のおおよそを紹介する。後半は出版社の感想が加えてある。それを前後にわけて次に引用する(記号は陳大康)。

[編年②684]『俄事警聞』第73号1902.2.25

支那新書局廣告

是書為泰西著名之小説，歷叙露漱與夫因貧勃谿，其（夫）憤而遠遊澳洲。後露漱私易姓名，改嫁某男爵。不數月，其夫致富歸。露漱與聞其父，偽托病死。其夫得死耗，一慟幾絕。嗣無意遇之于男爵某，大驚喜，趨與語，置不理，反被推落枯井中。後為其友某律師察出隱情，代為復仇。

本書は西洋の著名な小説である。次のことを述べる。露漱とその夫は貧困のために家庭内不和となり夫は怒って遠くオーストラリアへ行った。後に露漱は密かに姓名を変えある男爵に嫁いだ。数ヶ月もせずその夫が金持ちになって帰ってきた。露漱は父親から聞いて病死と偽る。夫は死亡を知って悲嘆のあまりほとんど死にそうになった。偶然あの男爵に出会い大いに喜んで話したがり取り合ってもらえずかえって枯れ井戸に突き落とされる。その後、友人の弁護士が秘密を探索し彼の代わりに仇をうった。

物語の粗筋だ。大きく間違っているわけではない。しかし「露漱は密かに姓名を変え〔露漱私易姓名〕」と説明したのは事実ではない。もとは海倫だったが露漱に変えたのが正しい。

推理小説の要素を持っているから核心部分を暴露するのはよくない。それをあっさりと破る。現在からみれば無神経なものだ。当時の広告にはそれが普通のこととして出現している。しいていえば海倫を出さなかったから種をばらすことにはならないと考えたか。

細かいことだが「数ヶ月もせず〔不数月〕」というのは勘違い。実際は3年半である。枯れ井戸に突き落とされたのは露漱の夫である喬治だ。露漱が関係している。しかしそのまま死亡したわけではない。助け出されて後に自ら「私は枯れ井戸に突き落とされたのちに〔我被推落井後〕」（80頁）と述べているからわかる。

蓋天下至陰險至狠毒之女子，無有過于露漱者也。請天下讀《茶花女遺事》者，再讀《露漱伝》，始知色界欲海中，變狀万端，如吳道子画地獄變相圖也。洋装美本，每冊洋二角，薆批從廉。總經理：上海棋盤街支那新書局。

おおよそこの世で最も陰険かつ最も悪辣な女性といえば露漱を超えるものは皆無である。この世で『（巴黎）茶花女遺事〔椿姫〕』を読まれた人はさらにこの『露漱（格蘭小）伝』を読んでいただきたい。読めば色欲の世界が変化きわまりないことを知るであろう。まるで吳道子が地獄絵図を書いているかのようだ。（以下略）

吳道子、のちの道玄は唐代の画家、地獄絵を得意とした。広告主は露漱を最低の悪女として清末の読者に紹介宣伝した。

イギリス人男性が食い詰めてオーストラリアへ渡る。その妻は美貌を武器に改名して男爵夫人に成りあがる。経済的に余裕が出てくるとその生活を手放すのが嫌で元の夫を邪魔者扱いにする。たしかに悪女に違いない。いかにも当時のイギリスで書かれた大衆小説のひとつのように思われる。 □

★

『中国現代文学研究叢刊』

2021年第5期（総第262期）2021.5.15

- 【書評】“未有深于学而不長于文者”——陳平原《現代中国的述学文体》芻議……………李浴洋
- 【書評】“跨際”“歷史”与“文心”——《紫羅蘭的魅影：周瘦鵑与上海文学文化、1911-1949》与陳建華的治学理路……………石娟
- 【書評】文学性別研究的日常生活方法論与公共性問題……………姜肖

次号の公開は2022年1月1日を予定しています



## 包天笑漢訳クレイ「古王宮」

——涙香訳『古王宮』の原作

荒井由美

清末民初の翻訳を研究するとき最初に出てくるのが底本特定という難問だ。原作者、原作名を明記しない作品が多い。もうひとつの理由は翻訳の経路が複雑だ。

外国作品から直接漢訳するばかりではない。当時は日本語経由で重訳する作品もある。図式で示せば、外国語原作→日訳→漢訳という順序である。漢訳を扱うとき以前は日訳どまりですませることもあった。しかしやはり遡って外国語原書まで手を伸ばすのが望ましい。それだけ困難が増加するが。

底本が改編作(第2翻訳または重訳)のばあいは捜査の対象は先にのびて原作にまでひろがる。改編作の底本が西洋の原書であることを言っている。そうしようとすれば手間は何倍にも増加する。なかなか難しいところだ。

先行文献があればそれを手がかりに探索を進めていく。文献が間違っていることも時たま見受けられる。別の文書からただ引用して誤ることは普通のことだ。結局のところ実物を手にして自分で判断しなければならない。実物と簡単というが作品それ自体を入手するのに困難が伴う。清末民初の翻訳にはつきものなのだ。

以上は一般論だ。

本稿では包天笑訳「古王宮」について説明する。ただし漢訳されたのが一部分だ。言及する

にも限りがある。

### 1 クレイ原作から日訳と漢訳へ

包天笑漢訳「古王宮」を見る前にその底本とした黒岩涙香日本語訳について説明する。

涙香小史(黒岩涙香)訳「古王宮」は最初『万朝報』(1899.2.26-5.13 54回)に掲載された。翌年扶桑堂より単行本になる(1900.8.1)。



原作については早くからバーサ・M・クレイ BERTHA M. CLAY (本名シャーロット・M・ブレイム CHARLOTTE MARY BRAME、1836-1884)の『わが身との戦い(AT WAR WITH HERSELF)』と指摘されている。現代風に『自分との戦い』としても同じだ。その「自分」はクレイ作品には多い女性の主人公を指す。

クレイ原作に言及した主な人々は次のとおり。緒方流水(1902)、柳田泉(1935)、伊藤秀雄(1979)、中村忠行(1980)たちである。

それぞれの説明は注にまとめる\*1。

クレイを指摘した各人の書き方を見ると流水を除いて奇妙な一致箇所がある。流水はクレイ作品を掲げて断言した。しかし柳田は「というものゝのよし」、伊藤「とか」、中村「と言ふ」などと伝聞表現にしている。クレイ本の実物を入手できなかったとわかる。しかし結論をいえばクレイ本で正しい。

涙香訳を底本にしたのが包天笑漢訳だ。涙香日訳と同じく「古王宮」と題する。涙香の原作がクレイ本だからそれと包天笑を直結させて本稿の題名は「包天笑漢訳クレイ「古王宮」」である。

呉門天笑生(包天笑)訳「(言情小説)古王宮」2章 『月月小説』第2年第10、12期(第22、24号) 戊申(1908)十月、十二月

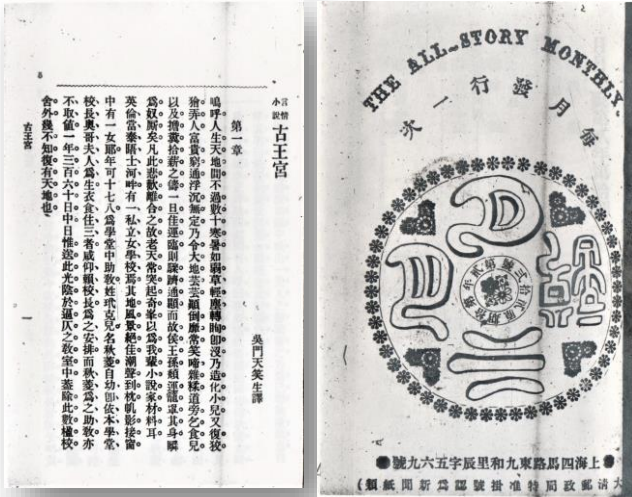
中国にはいなかった。阿英目録([阿英118])は「古天宮」と題名を誤っているくらいだ。だいいち阿英目録は原作を明記しないのが原則である。そうなると必要とするのはこのばあい記載のある先行文献ということになる。

包天笑の漢訳が涙香『古王宮』だと示唆したのは中村忠行だった。題名が同じところから推測したとわかる。流水、柳田、伊藤らがクレイ作と書いているのを参照したのだろう。あとはそれを確認するだけだ。

## 2 天笑漢訳と涙香日訳

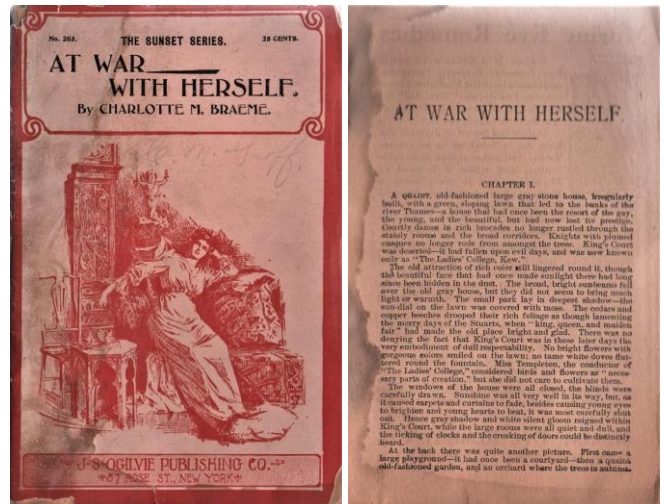
包天笑漢訳は2章が『月月小説』に掲載された。続けての掲載は見られない。のちそれが『冷笑叢談』(上海・群学社図書発行所1913.1/1914.3再版)に収録される(未見)。結局のところ包天笑漢訳は完成しなかったようだ。未完のままだから単行本にもなっていないと思う。筆者が見ているクレイ本は次のとおり。

CHARLOTTE M. BRAEME. "AT WAR WITH HERSELF." J · S · OGLIVIE PUBLISHING CO. THE SUNSET SERIES. NO. 203. 刊年不記(1890s)\*2



包天笑の名前が表示されるだけだ。該作第2章(第24号掲載)では「笑」のみで「訳」の記載が消滅する。涙香とクレイの名も表示されない。表示だけを表面的に見れば天笑の創作作品ということになる。

ただし本文を読めば「英倫」「泰晤士河畔」と出てくる。そこから原作は外国小説らしいとわかる。かといってそれだけで原作者と原作名が浮かんでくるわけでもない。知識を持つ人が



漢訳と日訳を比較対照した。涙香訳の第5回冒頭部分までを漢訳して中断したことがわかった。

天笑訳「(言情小説)古王宮」第1、2章は

涙香の新聞連載と単行本にある小見出しを収録漢訳していない。両作品を対応させると以下のとおりになる

呉門天笑生訳 第1章

＝涙香の『万朝報』掲載2回分—第1回『水鏡』(1899.2.26)、第2回『重大な用向』(2.27)

天笑 第2章

＝涙香の『万朝報』掲載2回分と少し—第3回『富貴の辛抱』(3.1)、第3[4]回『広き世界に唯の一人』(3.2)、第4[5]回『養女なら子も同然』(3.3)冒頭20行を漢訳7行に圧縮

涙香の新聞連載で回数を間違ったのは不注意からだろう。単行本では訂正されている。

以下においてクレイ原作、日訳、漢訳の冒頭部分を示す。

#### 【クレイ】 CHAPTER I.

A QUAIN, old-fashioned large gray stone house, irregularly built, with a green, sloping lawn that led to the banks of the river Thames—a house that had once been the resort of the gay, the young, and beautiful, but had now lost its prestige.

趣のある古風な灰色石造りの大きな家である。不規則に建てられテムズ川のほとりにつながる緑の傾斜した芝生のあるその家はかつては陽気で若く美しい人たちの憩いの場所だった。しかし今ではその名声を失ってしまっている。

主人公は家族もなく貧しい女性レオニー・レイナー (Leonie Rayner) だ。彼女が仕方なく身を寄せる女学校を説明することから物語ははじまる。それが涙香訳では様子が異なる。原作

にない文章を加筆しているのだ(ルビ省略。[ ]は単行本、また頁数を示す)。

#### 【涙香】 第一回『水鏡』

世に人の身の浮沈ほど料り難きは莫し、運好くば、今日路傍に飢凍えんとする人も明日は忽ち金衣玉食の身分と為り、運悪[し]くば、長く榮華に誇りし身も一朝にして人の憫みに露命を繋ぐ人と為る、一つは其人々の心柄にも在ることなれど、運不運の一去一來は実に造化の悪戯とも云ふべき歟／説起す、英国テムス河の辺に、餘り繁昌もせぬ私立女学校あり、1頁

飢え凍える人も運がよければ美衣美食(錦衣玉食)の身分となる。貧しい主人公は親戚の莫大な財産を突然相続することになった。その運命を冒頭にまとめた。読者に作品全体の構造を予告したことになる。続いてテムズ川のほとりにある建物へと筆を運んで原文に戻した。

涙香訳を底本とした天笑漢訳は次のとおり。

#### 【天笑】 第一章

嗚呼。人生天地間。不過數十寒暑。如弱草輕塵。轉瞬即沒。乃造化小兒。又復狡獪弄人。富貴窮通。浮沈無定。乃令大地芸芸。転倒靡常。笑啼雜糅。道旁乞食兒。以及担糞拾薪之儔。一旦佳運臨。則驟躋通顯。而故侯王孫。頽運籠罩其身。瞬為奴厮矣。凡此悲歎離合之故。老天常突起奇峯。以為我輩小説家材料耳。

英倫當泰晤士河畔。有一私立女学校焉。其地風景絶佳。潮声到枕。帆影接窗。

ああ、人はこの世に生まれてわずか数十年のうちに弱草にへばりついた軽い塵のように瞬時にいなくなってしまう。運命はさらに悪賢く人をもてあそぶ。貧賤と富貴は定着することもなく大地に満ちあふれひっくり返って無常で泣き笑いが混じりあう。

道端の乞食と糞担ぎや薪拾いの仲間が幸運にみまわれるとただちに成り上がる。また王侯貴族の子孫であろうと不運がその身に降りかかれば瞬時にして奴僕となる。すべて常ならぬことだからこの世に突然出現する奇怪なことは我らが小説家の材料となるのである。

イギリスのテムズ河畔に私立女学校があった。そこの風景は素晴らしく波音が枕元に聞こえ船の帆が窓に近づいている。

冒頭に運命に翻弄される人のはかなさを述べる。涙香を下敷きにしているのは明らかだ。ただし大筋に沿いながら細部は異なる。天笑が自分にとって手慣れた語句を使用して勝手に文を綴ったもの。翻訳者の自由といったところだ。

天笑が文中に小説家として出現しているのが少し違う。クレイと涙香訳にはない加筆をして作者としての存在を示した。あとはクレイ原作に移動しているのは涙香にならった。定型の波音、帆影を書き加えて読者の理解に訴えかける。

冒頭に登場する人物の名称を対照表にする。クレイ／涙香／天笑の順である。

主人公17歳 レオニー・レイナー Leonie Rayner／稲川菱江（伯爵柳園家女主菱江姫）／（姓）玳克兒（名）秋菱（柳起士家女主人伯爵秋菱姑娘）

父陸軍大尉レイナー Captain Rayner／陸軍大尉稲川勇／玳克兒雄存

母アリダ・クレルモン Alida Clermont／倉本敏子／古爾敏恵

校長テンプレートン Miss Templeton／奥谷夫人／奥哥夫人

弁護士クレメンツ Mr. Clements／栗畑賢造／律脱爾（また兒）亨士

古王宮管理人ダンスコム Mr. Dunscombe／団桂吾／寶圭利

チャーンリー伯爵 Earl of Charnleigh／柳

園伯爵／柳起士伯爵

大尉ポール・フレミング Captain Paul Flemyng／中尉古水保路／中尉哥世勃羅

涙香はレイナー Rayner を稲川にした。「イナ」から「稲」を連想したものか。はっきりはわからない。天笑が稲川を玳克兒に漢訳するのも理由不明。涙香も天笑も人名については自由に定めている印象がある。翻訳というよりも底本に沿った翻案という側面が強い。

### 3 天笑の改編

校長が外出している間、レイナーは散策する。鏡のような川面に自分の姿を認めて独り言をいう場面だ。

【クレイ】“Ah, if that face belonged to any one else, it would be called ‘very pretty.’ It is fairer than Isabel Gordon’s — and they rave about her beauty. Who could find anything to admire in a governess — nay, not even a governess, only a pupil who teaches? I might just as well have been ugly, for all the good my beauty does me.”p.2（中略）“Some sigh for genius, for fame,” She murmured; “I ask for love and money. Let me taste some few of the pleasures of the world;（後略）”p.3

「アア、あの顔が他の誰のものでもないとしたら「とても美しい」と言われるでしょうね。みなが美しいと激賞するイザベル・ゴードンよりもずっと美しいわ。家庭教師、いや家庭教師でさえないただの助教師を誰が尊敬するもんですか」（中略）

「愛とお金が欲しい。この世の快樂を少しでも味わわせてください（後略）」と彼女はつぶやいた。

貧しいレイナーがつぶやくその言葉には彼女の置かれた環境と経済的立場が明確に説明されている。「愛とお金が欲しい」に注目する。クレイは主人公が愛情と金銭を欲しているとはっきり書いている。そのふたつから見放されている若い女性だという人物設定である。

次が涙香の文章だ(くり返し記号は文字に変換した)。

【涙香】「何だつて此様に美しく生れたぐらふ、生徒の中の美人と云ふ那の令嬢よりも此影の方が、余ほど愛らしいのに、ア、お金が無ければ仕方が無い、何時までも助教だ、校主からは厄介者と云はれ、下僕にまで口穢く呼廻はされる、誰も此顔を、美しいとも、何とも云ふては呉ぬ、生涯助教を勤るなら、何も綺倆などは要らぬのに」(中略)「一イヤイヤ何うするにも斯するにもお金が先、ア、お金が欲しい、身代とやらが欲しい、貧しく生れるのは人間の一番損だ」第1回 3-4頁

クレイ原作にある「お金が欲しい」には「愛」も挙げているのだが涙香は片方を無視した。「お金が無ければ仕方が無い」「お金が欲しい、身代とやらが欲しい」を重ねて貧困さを強調した。「身代」は大きな富をいう。自分に無関係だから「とやら」と遠い存在だ。その欲望をあらゆるさまにするのは後の遺産相続に関係するからだ。

天笑は漢訳して絞り込んでいる。

【天笑】方夷猶問。偶見碧波如鏡。中映出一美人之影。細審之。乃為己容。秋菱歎息。自呼其名曰。秋菱秋菱。汝運蹇命薄。枉生此好顔色也。3頁

ゆったりとしてふと見ると鏡のような水面に美しい人の姿が映っている。目を凝らせば自分だった。秋菱はため息をついた。

自分で名前を呼んで言うのだった。「秋菱よ秋菱、お前は不運であるのに無駄に器量よしだね」

天笑の漢訳には主人公が金銭に執着する箇所が無視されている。そこがクレイ原作と涙香日訳とは異なる。

異なるといえば遺産相続を伝えに来た弁護士についても天笑は変更を行なっている。このばあいは加筆だ。

【天笑】嗚呼。律師者。乃保護人之財産権利。為其職掌。或司人之争訟与継続問題。3頁

ああ、弁護士とは人の財産権利を保護することを職分とする。あるいは人の訴訟と相続問題を執り行なう。

清朝末期には弁護士そのものが一般に認識されていない。天笑はそこから単語の説明が必要だと独自に判断した。作品によってはカッコに入れて注釈とする。あるいは訳者が登場して口を挟む。天笑のこのばあいは地の文に断りなく加筆した。

レイナーの人物確定を終えて弁護士は宣言した。

【クレイ】instead of being Miss Leonie Rayner, a governess pupil, you are Leonie, Countess of Charnlei, and mistress of one of the finest estates in England. p.6

あなたは教師レオニー・レイナー先生ではなくチャーンレイ伯爵のレオニーであり英国屈指の豪邸の女主人であります。

クレイは簡潔に描写している。「one of the finest estates in England 英国屈指の豪邸」と書くだけで充分だと考えた。ここには涙香のいう「古王宮」はない。それでは説明不足だと涙香は考えて少し加筆した。

【涙香】 貴女は最早や此の私立女学校の助教師稲川菱江女では無く全く當国随一の由緒ある家筋柳園伯爵家の當主、菱江姫です、古王宮として知らるゝ英国屈指の莊園、及柳園家に属する財産は悉く貴女の物です  
第2回 13頁

「英国屈指の莊園」の別称が「古王宮」ということにした。これが小説題名になっている。ここは涙香独自の説明であってクレイ本には存在しない。

次が天笑の漢訳だ。

【天笑】 請姑娘辞此私立女学校助教之職。将請姑娘為本国著名豪族柳起士伯爵家之主人。姑娘當知人人稱為古王宮為英国屈指之莊園。及柳起士伯爵家之財產。悉為姑娘所有也。8頁

あなたはこの私立女学校の助教師をお辞めください。あなたは本国著名の豪族柳起士伯爵家の主人となられますように。古王宮は英国屈指の莊園であると人々が申していることをあなたはご存じでしょう。柳起士伯爵家の財産はことごとくあなたの所有となります。

ここの天笑漢訳は涙香日訳をほぼ忠実になぞっている。

思いもよらぬ突然の富豪宣告にレオニーはうろたえてしまう。

【クレイ】 She buried her face in her hands and wept. The two men looked at her in kindly sympathy, evidently understanding her emotion.

“But what shall I do?” she inquired. “I have never had any money; I am unused to wealth and comfort; my life has been hard and lonely, dreary and dull—how

shall I bear this great change?” p.7

彼女は顔を両手に埋めて泣いた。ふたりの男は親切に同情して彼女を見た。明らかに彼女の感情を理解していた。

「でもどうしましょう」と彼女はたずねた。「私はお金を持ったことがありません。私は富と快適さには慣れていません。私の人生はつらくて孤独で、退屈でつまらなかった——この大きな変化にどう耐えればいいのかでしょうか」

クレイは富と快適さに関連があると考え。ゆえに金銭問題は個人の人生に重要な意味を持つ。その金銭が無から有に激変するから主人公の心理的不安は増大した。感情の高まりの結果は泣くよりほかにしようがない。

【涙香】 第3回

菱江は顔を両手に埋めて泣けり、栗畑と団の二人は信切気に、気の毒げに、顔と顔とを見合わせたり、頓て菱江は顔を挙げて涙を拭ひ「何うしたら好のでせう、私しは今まで金銭を持た事さへ無く、辛い、淋しい、味気ない境涯に育つて来た者ですのに、不意に此様な事に成つて、ホンに何うして好いか分りません」16頁

涙香訳はクレイ原作そのままだ。人生の基本が金銭によって左右されると認識している。

【天笑】 秋菱此時喜極涕零。捧顔而泣曰。我向不知世界所謂富貴財產乃与我事。我乃為天涯一。畸零之人。今乃富貴逼人來。我如何處此乎。10頁

秋菱はこの時喜びが極まり落涙し顔を両手ではさんで泣きながら言った。「世界のいわゆる富貴財産と私に関係するとは私はずっと思いもしませんでした。私は天涯孤独の人間です。今富貴の方が迫ってきたの

ですからどうすればいいのでしょうか」

天笑は圧縮している。男性ふたりの反応描写は翻訳しなかった。一方で「喜び」を加えた。涙香の「今まで金銭を持た事さへ無く、辛い、淋しい、味気ない境涯に育つて来た者」を「我乃為天涯一。畸零之人」と簡略化して表現した。「金銭」という単語そのものを前面に出すことを嫌ったようだ。

弁護士は遠い親戚に大尉ポール・フレミング Captain Paul Flemyng (中尉古水保路/中尉哥世勃羅) がいることをレオニーに告げる。物語の展開に必要な人物だ。

弁護士たちが帰ったあとにレオニーは自分の内側から喜びが湧き上がってくるのを感じた。これが涙香日訳である。しかしその部分はクレイ原作には存在しない。

【クレイ】原作になし

【涙香】後に姫は[、]今までの当惑の想よりも、形容に言葉なき異様な嬉しさの、夢の如く浮び起り、身は人間の世界よりフワフワと離れて軽く軽く自から天国に浮き上る如き心地し、恍として身外境遇の如何をも忘れ、酔へる人の如く立尽せしが、……  
第3 [4]回 24-25頁

「姫」とは古王宮の主となった菱江を指す。原作にない涙香の加筆である。どうしても菱江の喜びを書き加えたかった。クレイ作のように下女が登場していつものようにレオニーをいじめる前に追加したい内容だった。

【天笑】此時秋菱殆似偌大応接室。不能盛此喜氣。而此身亦飄忽如夢。早離人間世而登天国矣。15頁

その時の秋菱はこれほど大きな応接室でも喜びの気持ちを収容できなかったように、その身体は夢のようにふわふわと浮き上が

りすでに人間世界を離れて天国に昇っていた。

下女はレオニーが古王宮の相続人になったことを知らない。いつもどおりの意地悪さでレオニーに対応する。ここで包天笑の漢訳は中断した。 罫

#### 【参考文献】

堀 啓子「黒岩涙香の翻訳小説：Bertha M. Clay 原作の「古王宮」をめぐる」慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』第91巻第1号開場武教授退任記念論文集 2006.12 電字版。使用版本は New Bertha Clay Library No.78 Street & Smith Co. 1900

#### 【注】

1) 以下のとおり。

緒方流水『青眼白眼』星光社1902.6.2。奥付は緒方維嶽(国会)。架蔵は鳴皋書院1902.6.2/1902.8.10再版

[流水161]「古王宮」作者バルサ、エム、クレイ “AT WAR WITH HERSELF.”

柳田泉「黒岩涙香翻訳小説目録」『書物展望』第49号 1935.7.1

[柳田48]『古王宮』、原本バアサ・クレイ女史『わが身との戦ひ』AT WAR WITH HERSELF というものゝよし。

伊藤秀雄『(改訂増補) 黒岩涙香その小説のすべて』桃源社1979.5.15

「原作はバアサ・クレイ女史の『わが身との戦ひ』(At War with Herself) とか」276頁

中村忠行「清末探偵小説史稿—翻訳を中心として(3・完)」『清末小説研究』第4号 1980.12.1

[中村 S4-51]「包天笑訳『古王宮』(『月月小説』第二巻第十・十二期, 光緒三十四(1908)年十月・十二月)と、同一書の別訳といふことになる。原作は、バアサ・クレイの『わが身との戦ひ』(BERTHA CLAY: “AT WAR WITH HERSELF.”) と言ふ」51頁

2) 雑誌“Family Herald”連載(1874.7.27-10.10) 未見。[Law12]Graham Law, Gregory Drozd, Debby McNally, Charlotte M. Brame (1836-1884). Victorian Fiction Research Guide 36[Version 1.1 (May 2012)]

## 商务印书馆编译所编辑

## 甘永龙的翻译实践

王 玉 梁 艳

**[摘要]**甘永龙，字作霖，浙江嘉兴人，清末民初时期在上海商务印书馆编译所担任编辑。他精通英文，译作丰富，除《孙大总统自述 伦敦被难记》、《广告须知》等颇具影响力的非文学类翻译作品外，还有法国作家大仲马的文学名著《基督山伯爵》的节译本《炼才炉》，以及《车中语》、《福尔摩斯侦探案》等侦探小说。在当时的译坛，甘永龙不是个别现象，像他这样的编辑型翻译家，已成为一个影响力较大的群体，是中国近现代翻译史上一道亮丽的风景线。

**[关键词]**甘作霖；商务印书馆编译所；文学翻译；侦探小说；清末民初

中国近现代翻译文学史上，有一批重要的翻译家来自出版机构，比如翻译《莎士比亚全集》的世界书局英文部编辑朱生豪。浙江嘉兴人、商务印书馆编译所编辑甘永龙，也是其中的佼佼者。不过，目前尚无论著对其生平及译作进行全面深入的考察。笔者多方搜集史料，力图还原出甘永龙这位专家型编辑的人生经历，并对其翻译实践及影响进行评述。

## 一、甘永龙的生平

甘永龙（英文名为 KAN TSO-LING，或 KAN TSAO-LING，系甘作霖三字的威妥玛式

拼音），又名甘永泷，字作霖<sup>\*1</sup>，生卒年不详，浙江省嘉兴市平湖市乍浦镇人，是一位活跃在清末民初上海出版界的编辑、翻译家。依据甘永龙译作发表时间，可以发现他的翻译实践集中在1906-1921年间，前后长达16年。

甘永龙精通英文，任职于商务印书馆编译所英文部，业余翻译一些欧美小说<sup>\*2</sup>。但他并没有出国留学的经历，而是毕业于南洋公学。南洋公学是上海交通大学的前身，1896年由盛宣怀创办<sup>\*3</sup>。这所新式学堂位于通商巨埠上海，离他的家乡不算远，他应该是早期毕业生之一。笔者查阅了1915年3月创刊、由上海南洋公学同学会编辑的《南洋》季刊。该刊《南洋公学同学会乙卯职员表》一文显示，甘永龙担任南洋公学同学会杂志部部长。这证实了甘永龙的教育背景。

除了在商务印书馆编译所拿一份不菲的薪水外，甘永龙还兼职赚些外快。从1915年开始，他出任《新闻报》兼职翻译。该报是上海四大报之一（其他三报是《申报》、《时报》和《时事新报》）<sup>\*4</sup>，1893年2月17日在上海创刊。1899年11月，由美国人福开森（John C. Ferguson）购得。1906年改组为有限公司，福开森任总董事。福开森长期聘请中国人汪汉溪担任总理。福开森曾任南洋公学首任监院<sup>\*5</sup>，汪汉溪曾任南洋公学总务且为福开森赏识。甘永龙能在《新闻报》兼职，或许有南洋公学这一层关系。

甘永龙担任过进步党《时事新报》主笔（编辑）<sup>\*6</sup>。《时事新报》原名《时事报》，1907年12月9日在上海创刊，1911年改名为《时事新报》，为民初年政治派别研究系机关报<sup>\*7</sup>。笔者还发现，1912年九月初八日，上海张园召开熊成基、白雅雨、王汉、刘敬庵四烈士追悼大会。甘永龙与黄兴、蔡元培等人一起名列发起人<sup>\*8</sup>。这些史料在一定程度上反映了甘永龙的政治立场。

1921年，甘永龙突发精神疾病。对于发病原因，他的商务印书馆同事谢菊曾后来回忆：“我离所后不久，听人谈起他于业余耗了数年心血，编了一部英汉字典，满以为售给商务，一定可得善价。岂知该馆当局嫌他平时在所工作非常



马虎，一心只想利用业余时间捞外快，因此有意拒绝收购这部字典稿本，这么一来，甘作霖大受打击，从此书空咄咄，神经有病。”<sup>9</sup>说甘永龙“一心只想利用业余时间捞外快”，不算离谱，因为他在工作之余除了在报社兼职，还翻译了不少小说。但说甘永龙“工作非常马虎”则存在疑点，从现存的译作看，他在商务印书馆勤于翻译，成果很多，包括1915年出版的《英华日用字典》。谢菊曾自己也说过，甘永龙“擅长英汉翻译，《英文杂志》中经常有他的作品。商务早期出版的好多种英文文学名著，英汉对照，并逐段注释，大半出于他手。”<sup>10</sup>大约在患病后不久，甘永龙就去世了。甘永龙兼职的《新闻报》，对他的晚年生活有过两句简短的记录：“甘君作霖，于民国四年任本馆译员，六年后即发狂疾，孑然一身。（汪汉溪）先生悯其贫病，虽不任事，月致薪水终其身，并为经营丧葬。”<sup>11</sup>从“孑然一身”的描述来看，甘永龙应该没有家室。从1918年开始，甘永龙在商务印书馆就没有出版或发表过译作。笔者猜测，他此时有可能已从商务印书馆离职，但他在《新闻报》的兼职工作则一直持续到1921年。

## 二、甘永龙的非文学翻译活动

仔细梳理现存的甘永龙译作，可以发现他的翻译实践大致分为两类：一是非文学翻译活动，包括编译英文教材及辅导材料、为报刊翻译外电等；二是文学翻译活动，主要是翻译一些欧美小说，其中侦探题材占大多数。

### 1. 编译英文教材及辅导材料

甘永龙从新式学堂上海南洋公学毕业后，利用他擅长的英文，在商务印书馆编译所谋得编辑一职。商务印书馆编译所成立于1902年，设国文、英文、理化数学三部。据谢菊曾回忆，商务印书馆编译所三个部门中，以英文部最吃香。英文部的基本队伍如徐闰全、甘作霖、吴继杲、张叔良、周越然月薪都很大。其中，甘作霖、吴继

杲、张叔良三人是校友，都毕业于南洋公学。“我进去时，他们供职均各有十四年以上的历史了。”<sup>12</sup>谢菊曾是1916年进入商务印书馆编译所的<sup>13</sup>。据此推断，甘永龙加入编译所或商务印书馆的时间在1902年前后。但目前能看到的甘永龙在商务印书馆编辑的图书最早出版于1906年。换言之，至少从1906年开始，他即在商务印书馆工作。



图1:《中学英文读本》封面

商务印书馆编译所成立之初，主要编辑出版小学教科书<sup>14</sup>。与此相应，甘永龙在商务印书馆编译所编译了大量的英文教材及辅导材料。笔者搜集到了十余种相关图书（见表1），出版时间在1906-1918年间。这些出版物的版权页显示，署名多为甘永龙，偶尔是甘作霖，身份则多种多样，有时是校订者、校勘者、参订者，有时是注释者、编纂者、著作人、译述者或释注者。编译英文教材及辅导材料是甘永龙最重要的本职工作，他承担的任务有编辑、校对、翻译、注释等。其中，《原文莎氏乐府本事附汉文释义》、《原文撒克逊劫后英雄略 附汉文释义》、《原文天方夜谭 附汉文释义》应该就是上文谢菊曾提到的“英文文学名著”。

表1 甘永龙编译的英文教材及辅导材料

书名	出版机构	时间	备注
华英进阶	商务印书馆	1906	校订者
增广英文法教科书	商务印书馆	1909	校勘者
原文莎士比亚乐府本事 附汉文释义	商务印书馆	1910	注释者, 1916—1917年《英文杂志》2卷1期-3卷9期连载
原文撒克逊劫后英雄略 附汉文释义	商务印书馆	1910	校订者
原文阿狄生文报 摺华 附汉文释义	商务印书馆	1911	注释者
共和国教科书 高等小学英文读本	商务印书馆	1913	参订者
共和国教科书 中学英文读本	商务印书馆	1913	参订者
汉英对照 圣迹图	商务印书馆	1914	译述者
英华日用字典	商务印书馆	1915	著作人
“惜阴英文选刻”丛书	商务印书馆	1917	释注者, 包括《黄金王》、《奇筵》、《伟丈夫故事》、《电话问答》和《双袜记》等
原文天方夜谭 附汉文释义	商务印书馆	1917	校订者
汉译英文会话	商务印书馆	1917	校订者
汉释英文杂记	商务印书馆	1918	编纂者, 第二集, 《英语周刊》选本之一

## 2. 参与报刊编译活动

甘永龙的报刊翻译活动, 始于《东方杂志》。《东方杂志》是近代中国历史最久的大型综合性杂志, 1904年3月11日在上海创刊, 初为月刊, 1920年第十七卷起改半月刊, 由商务印书馆出版<sup>\*15</sup>。1908-1916年间, 甘永龙在《东方杂志》上发表了200篇左右的编译文章, 涉及杂俎、言论、新知识、世界大事记等栏目。其中, 最早的一篇是1908年发表的《光学游戏》(《东方杂志》5卷7期)。甘永龙在此刊上的署名有作霖、甘永龙、甘永洸等。

“擅长英汉翻译”的甘永龙, 在《英文杂志》、《英语周刊》上还发表了多篇文章。《英文杂志》(*The English Student*)创刊于1915年1月, 月刊, 上海商务印书馆发行。杂志扉页显示, 毕

业于南洋(NANYANG)公学的甘永龙, 名列编委会<sup>\*16</sup>。1915-1917年间, 甘永龙在此刊大约发表了36篇文章。最早的是刊于《英文杂志》1915年1卷1期、由其译注的《霍爽氏之奇书》(*Hawthorne's Wonder Book*)。霍爽氏现译霍桑, 是一位美国小说家。甘作霖还翻译了《莎士比亚乐府本事》(*Tales from Shakespeare by Charles and Mary Lamb*)中的《丹麦太子哈姆来德》、《威内萨之商人》和《麦克伯》三种。《英语周刊》(*ENGLISH WEEKLY*)创刊于1915年10月, 同样由上海商务印书馆发行。甘永龙是编辑部成员(EDITORIAL STAFF)之一<sup>\*17</sup>。从1915-1917年三年间, 甘永龙以英文名Kan Tso-ling 编译了225篇文章。《英文杂志》和《英语周刊》都是教辅类杂志, 主要为英语爱好者提供学习英文的平台。甘作霖在《英文杂志》、《英语周刊》的编译工作, 可以视为编译英文教材和辅导材料的延续。

鉴于《东方杂志》、《英文杂志》和《英语周刊》三份刊物均由商务印书馆出版, 甘永龙在此发表文章应为职务行为。这与他在《新闻报》兼职不同。1915年1月12日, 甘永龙第一次为《新闻报》翻译外电。当天报纸第2版上, 有署名“作霖”的《法境战况之今昔》。1921年10月10日, 还可见到“作霖译”的《太平洋裁兵问题》。从1915年到1921年间, 甘永龙为《新闻报》翻译了500篇左右的外电新闻。翻译的来源有《字林报》(即《字林西报》, 1850创办于上海, 是外国人在中国创办的最著名、影响最大的一份外文报纸)、《纽约外览杂志》等。甘永龙在此报上的署名有“译者作霖”、“作霖译”等。甘永龙利用晚上的时间“兼任《新闻报》的西报翻译”“文笔流利晓畅, 颇受读者欢迎”<sup>\*18</sup>。总之, 甘永龙担任《新闻报》兼职译员, 纯粹是一种市场行为。

## 3. 两种翻译名作

在甘永龙的译作中, 有两种非文学类翻译作品名气和影响都比较大。一是《孙大总统自述伦敦被难记》, 中华民国元年(1912年)四月

由上海商务印书馆初版，甘永龙是编译者。对于这本书的内容，商务印书馆的广告这样介绍：“此书为孙君手著，历叙其兴中会之宗旨，及入会之目的，起义之失败，与夫在伦敦时被使馆之幽禁，英政府之干涉，详悉无疑，原书系用英文，今已绝版。本馆觅得原本，译为华文。吾国民有想望孙君风采及研求革命原委者，当必先观为快也。”<sup>19</sup>广告还明确此书由“甘作霖译”。这部孙中山重要著作有多个译本，甘永龙译本最早，在民国初年风行一时。

二是名列“商学小丛书”中的《广告须知》，中华民国七年（1918年）六月由上海商务印书馆初版，甘永龙编译。在中国广告学学科史上，这部译作很有名气，曾多次再版，笔者见到的是1933年再版本。许多学者认为，我国最早出版的广告学研究专著，当推由甘永龙编译的《广告须知》<sup>20</sup>。不过，近年也有学者提出商榷意见，认为我国最早的广告学研究专著是1910年左右李廷瀚撰写的《广告术》<sup>21</sup>。但这依然不能否认甘永龙这部译作是早期广告学研究专著中最有影响力的一部。

### 三、甘永龙的文学翻译活动

甘永龙编译的英文教材及辅导材料，也涉及一些文学作品。但这些文学译作比较零碎，而且仅仅是为读者提供学习英文的素材。甘永龙的文学翻译活动，更多地体现在小说翻译中。他翻译的作品大多来自英美作家，个别作品如《炼才炉》则是转译自英译本。谢菊曾说，甘永龙“于业余翻译一些欧美小说，售与商务出版”<sup>22</sup>。换言之，他翻译小说就是为了赚钱。这也解释了为什么甘永龙热衷翻译侦探小说，无非是赶当时译坛的潮流、迎合读者的胃口。

#### 1. 单行本小说

目前，版权页明确标为甘永龙翻译的单行本小说有5部，分别是《炼才炉》、《车中语》、《卢宫秘史》、《二义同囚录 加黎波的将军》

和《航海复仇记》。其中，前三种在商务印书馆出版，后两种由中国图书公司和记出版。

“政治小说”《炼才炉》，光绪三十二年（1906年）孟夏由商务印书馆首版，原著者英国亚力杜梅，译述者乍浦甘作霖。此书的翻译出版，表明甘永龙在进入商务印书馆后不久就开始了文学翻译活动。其实，这本小说节译自法国作家大仲马的文学名著《基督山伯爵》。甘永龙将作者误为英国人，这从侧面反映出《炼才炉》的翻译底本是英译本。乍浦，是浙江平湖的一个镇。除此外，甘永龙的籍贯都标为“平湖”。1914年4月，此书再版。在《基督山伯爵》汉译史上，《炼才炉》占有一席之地。这是一个被缩略的不完全译本，仅相当于法文原著前二十四章内容，保留了小说的主要情节，但大部分细节都被译者删去。译文突出表现了经历磨难、方成大器的励志主题，总体而言，甘永龙这样的处理是比较成功的<sup>23</sup>。

中华民国元年（1912年）十二月，“小本小说”、“笔记小说”《车中语》由商务印书馆初版，该书由美国加撒林克罗女史（Anna Katharine Green<sup>24</sup>）原著、甘永龙译述。实际上，这部小说1907年已在《东方杂志》（第四卷8-11期）上连载，译者平湖甘作霖，标“笔记小说”。加撒林克罗女史，现译安娜·凯瑟琳·格林（1846-1935），著有数十部侦探小说，被誉为美国“侦探小说之母”<sup>25</sup>。

《卢宫秘史》这部小说有两个初版本：一是中华民国三年（1914年）六月初版的“小本小说”，二是中华民国四年（1915年）六月廿四日初版的“历史小说”。小说原著者为英国作家恩苏霍伯（Anthony Hope Hawkins），译述者为平湖甘永龙、嘉兴朱炳勋。这部小说也是先在杂志连载，后结集出版单行本。1912年，《卢宫秘史》就开始在《小说月报》（第3卷1-8期）连载。值得一提的是，《卢宫秘史》后来又出版了两个新译本。1948年，文化生活出版社出版《增达的囚人》（The prisoner of Zenda，即《卢宫秘史》—笔者注）<sup>26</sup>。1993年4月，由主万、叶扬、叶

尊翻译的《卢宫秘史》(包括 *THE PRISONER OF ZENDA* 和 *RUPERT OF HENTZAU*) 在上海译文出版社出版, 原作者现译为安东尼·霍普。



图2: 《二义同囚录 加黎波的将军》封面

1916年8月,《二义同囚录 加黎波的将军》由中国图书公司和记出版。小说由英国作家亨旦原著,甘永龙、朱炳勋译述。其中,朱炳勋字文彬<sup>\*27</sup>,浙江嘉兴人,为甘永龙大同乡,他在《越报》、《小说月报》上发表过《鸣冠美人》、《合欢草》、《美人局》、《化外土》等小说,和甘永龙合作翻译过《卢宫秘史》和《二义同囚录 加黎波的将军》。顾名思义,《二义同囚录 加黎波的将军》讲的是意大利三杰之一、传奇式英雄加里波第的故事。

1917年5月,《航海复仇记》同样由中国图书公司和记出版。小说由英国作家铿斯莱(Charles Kinsley, 今译查尔斯·金斯利, 1819-1875)原著,甘永龙译述,汤颐琐校订。这位校订的汤颐琐,为甘永龙在商务印书馆的同事。又名汤宝荣,字伯迟,梁启超早年办报时曾聘其担任主编辑;宣统元年,与张元济相识,入商务印书馆;后离职,民国四年(1915年)复入商务印书馆;大约于1937年前后逝世<sup>\*28</sup>。谢菊曾回忆称,“我曾为他(甘永龙)译的一部《航海复仇记》当过校对,计分上、中、下三卷”<sup>\*29</sup>。不知道谢菊曾是否记错了。

除了这5部单行本小说之外,据学者古二德考证,《空谷佳人》亦由甘永龙翻译<sup>\*30</sup>。“爱情小说”《空谷佳人》,1906年在《东方杂志》(第三卷8-13期)上连载,未注明译者;1907年出版单行本,版权页显示由商务印书馆编译所译。笔者推断,这可能是甘永龙的职务行为,所以没标作者或标成商务印书馆编译所译。古二德同时提到,甘永龙译有培福台兰拿(Burford Delannoy)的作品。这应该指1905年刊于《东方杂志》(第二卷第1-5期)上的“侦探小说”《双指印》,原作者为英国培福台兰拿,未标译者。但古二德对此未加论述。《双指印》1905年由商务印书馆出版单行本,1913年出“小本小说”版。

## 2. 报刊小说

笔者对甘永龙在报刊上发表的翻译小说进行了统计,从数量上看,在1907-1917年间,甘永龙在《东方杂志》(5篇)、《小说月报》(4篇)、《南洋》(1篇)、《小说海》(1篇)等刊物上发表了11篇翻译小说。从题材上看,有7篇标明是“侦探小说”,1篇标明是“战事小说”,其他未标。从篇幅上看,有1篇标明是“长篇”,其他为“笔记小说”、“短篇”、“丛译”等。从底本来看,有1篇标明来自《斯屈兰脱》杂志,即 *The Strand Magazine*; 有1篇标明来自《大陆报》,即英文日报 *China Press*。

具体来说,1907年,甘永龙翻译了美国加撒林克罗女史5部侦探小说,《陶人案》、《数屡发》、《黑幻像》、《车中语》和《拯三厄》。其中,《车中语》后来出了单行本,这在上文已作介绍。这5部小说都发表在《东方杂志》上,标“笔记小说”。甘永龙对翻译侦探小说情有独钟。1911年,由他翻译的“侦探小说”的《福尔摩斯侦探案》,在《小说月报》(第2卷第12期)上刊载。这篇小说译自《斯屈兰脱》杂志(西历一九一一出版),即 *The Strand Magazine*。1915-1916年,甘永龙翻译的《薄幸女》(一名《恶侦探》),在《东方杂志》(第12卷第1期-第

13卷第5期)连载,原著者是英国的梅女士。1915年,甘永龙翻译的“长篇”小说《潜艇制胜记》在《小说月报》(第6卷第1-2期)上连载,该小说作者为柯南达利(Arthur Conan Doyle,现译柯南·道尔)。甘永龙翻译这些侦探小说,和当时的文学潮流有关。比如《东方杂志》从1904年创刊开始,就赶时髦地刊译起了侦探小说\*31。



图3: 甘永龙译《大佐仆》

除此之外,甘永龙还译有“战事小说”《大佐仆》(刊于1915年《南洋》第1期)、“短篇”小说《俄帝恶谗》(刊于1915年《小说月报》第6卷第1期)、“短篇”小说《宅鬼》(刊于1917年《小说海》第3卷第10期)、“丛译”《红发女》(刊于1917年《小说月报》第8卷第10期)。其中,《宅鬼》译自《大陆报》,即 China Press,英文日报,1911年8月29日创刊于上海,美国人密勒(Thomas F. Millard)创办\*32。《宅鬼》附有一段“译后记”。甘永龙称,“余前译《世界集》中,有记拿破仑鬼一节,因与星如君所译《拿破仑鬼篇》同一蹊径,因弃而不用。”据笔者比对,甘永龙提到的星如君所译《拿破仑鬼篇》,应为《拿破仑之鬼(译〈大陆报〉)》,刊于1913年《小说月报》第4卷第2期。甘永龙提到的《世界集》则不详。

表2 甘永龙的文学翻译作品

作品名	原作者	出版机构	时间	备注
炼才炉	[英]亚力杜梅	商务印书馆	1906	法国大仲马《基督山伯爵》节译
车中语	[美]加撒林克罗女史	《东方杂志》	1907	第四卷8-11期连载
陶人案	[美]加撒林克罗女史	《东方杂志》	1907	第四卷第5期
数缕发	[美]加撒林克罗女史	《东方杂志》	1907	第四卷第6期
黑幻像	[美]加撒林克罗女史	《东方杂志》	1907	第四卷第7期
拯三厄	[美]加撒林克罗女史	《东方杂志》	1907	第四卷第12期
福尔摩斯侦探案		《小说月报》	1911	第2卷第12期
车中语	[美]加撒林克罗女史	商务印书馆	1912	
卢宫秘史	[英]恩苏霍伯	《小说月报》	1912	第3卷1-8期
卢宫秘史	[英]恩苏霍伯	商务印书馆	1914	甘永龙、朱炳勋合译
大佐仆		《南洋》	1915	第1期
薄幸女	[英]梅女士	《东方杂志》	1915	1915年第12卷第1期-1916年13卷5期
俄帝恶谗		《小说月报》	1915	第6卷第1期
潜艇制胜记	柯南达利	《小说月报》	1915	第6卷第1-2期
二义同囚录 加黎波的将军	[英]亨旦	中国图书公司和记	1916	甘永龙、朱炳勋合译

航海复仇记	[英]铿斯莱	中国图书公司和记	1917	
宅鬼		《小说海》	1917	第3卷第10期
红发女		《小说月报》	1917	第8卷第10期

## 结 论

综上所述,商务印书馆编译所编辑甘永龙的翻译实践,具有典型的意义,值得深入研究。第一,他本人没有留学背景,接受的只是清末新式学堂教育,但依然精通英文、擅长英汉翻译;第二,他从事的是新式职业——出版机构编辑,而非当时比较常见的学者型翻译家、外交官型翻译家;第三,他的翻译处于“五四”白话文运动兴起之前的清末民初,译文采用的是相对浅显的文言;第四,他的译作类型、题材非常丰富,成果也很多。值得一提的是,像甘永龙这样的编辑型翻译家,在中国近现代翻译史上是一个不小的群体,有必要对这批被遮蔽的翻译家生平与译作进行系统整理,还原他们在当时译坛的地位,论述他们对翻译事业尤其是文学翻译所作的贡献。 ㊦

### 【注】

- 1) 陈玉堂.中国近现代人物名号大辞典(全编增订本)[M].浙江古籍出版社,2005,第129页。
- 2) 谢菊曾.十里洋场的侧影[M].花城出版社,1983,第47-48页。
- 3) 上海交通大学学校简介[EB/OL],2019-8-10,<https://www.sjtu.edu.cn/xxjj/index.html>。
- 4) 白寿彝主编.中国通史·第12卷·近代后编(1919-1949)上册[M].上海人民出版社,2015,第18页。
- 5) 夏征农、陈至立主编,大辞海·中国近现代史卷[M],上海辞书出版社,2013年,第257页。
- 6) 陈忠纯.民初的媒体与政治:1912-1916年政党报刊与政争[M].厦门大学出版社,2011
- 7) 程曼丽,乔云霞主编:新闻传播学辞典[M],新华出版社,2012年,第75页。
- 8) 四烈士追悼大会通知//江苏文史资料 第62辑 白雅雨[M].江苏文史编辑部,1993年,第133页。
- 9) 谢菊曾.十里洋场的侧影[M].花城出版社,1983年,第48页。
- 10) 谢菊曾.十里洋场的侧影[M].花城出版社,1983年,第47页。
- 11) 汪汉溪先生传[N],《新闻报》1924年12月7日,第20版。
- 12) 谢菊曾.十里洋场的侧影[M].花城出版社,1983年,第45页。
- 13) 谢菊曾.商务编译所与我的习作生活//1897-1992商务印书馆九十五年:我和商务印书馆[M].1992年,商务印书馆,第135页。
- 14) 李标晶、王嘉良:简明茅盾词典(第2版)[M],甘肃教育出版社,1998年,第385页。
- 15) 夏征农,陈至立:大辞海·中国近现代史卷[M],上海辞书出版社,2013年,第92页。
- 16) The English Student Editorial Board[J],《英文杂志》1915年第1期。
- 17) EDITORIAL STAFF[J],《英语周刊》1915年第1期。
- 18) 谢菊曾.十里洋场的侧影[M].花城出版社,1983年,第47页。
- 19) 双指印[M],商务印书馆,1913年,封底广告。
- 20) 陈培爰:20世纪中国广告学理论的发展[J],《厦门大学学报》(哲学社会科学版)1999年第4期。
- 21) 桂世河:五四时期之前的中国广告教育初探[J],《兰州学刊》2019年第3期。
- 22) 谢菊曾.十里洋场的侧影[M].花城出版社,1983年,第47页。
- 23) 禹玲:众声喧哗的晚清译界——以《基督山伯爵》译本为中心//翻译史研究.2014[M],复旦大学出版社,2015年,第153-184页。
- 24) 陈建华主编.中国外国文学研究的学术历程 第2卷 外国文学研究的多维视野[M].2016,第341页。
- 25) 罗小云:美国文学研究[M],重庆出版社,2013年,第166页。
- 26) 张泽贤著.巴金与现代文学丛书 1935-1949[M].上

海远东出版社, 2013年, 第460-462页。

- 27) 中国近代文学大系 1840-1919 第2集 第9卷 小说集 7[M], 上海书店出版社, 1992年, 第670页。
- 28) 为募集汤颐琐先生贖款公启/张元济全集 第5卷[M], 商务印书馆, 2008年, 第489-490页。
- 29) 谢菊曾.十里洋场的侧影[M]. 花城出版社, 1983, 第47-48页。
- 30) 古二德:《深谷美人》罕见林译与《空谷佳人》译者考辨[J], [日]《清末小説から》第117期, 2015年4月1日, 第21页。
- 31) 陈建华: 中国外国文学研究的学术历程(第2卷)[M], 重庆出版社, 2016年, 第341-342页。
- 32) 夏征农, 陈至立主编; 熊月之等编著.大辞海 中国近现代史卷[M].2013年, 第96页。

(作者王玉系上海行政学院校刊编辑部编辑; 梁艳系同济大学外国语学院副教授)

本文系国家社科基金青年项目“中国近代翻译文学中的日文转译现象研究(1898-1919)”(15CWW007)、国家社科基金重大项目“近代以来中日文学关系研究与文献整理(1870-2000)”(17ZDA277)的阶段性成果。

## 清末小説から

- 王 双啓○【書評】《中国近代文学史稿》『文学評論』1960年6期 1960.12.25
- 吳 燕○『猶太人の浮世』から『憂患余生』へ——語彙の選択から見る近代日中間の「重訳」『通訳翻訳研究』第13号 2013 電字版
- 竇 新光○附録: 明治小説の中国語韓国語の翻訳・翻案作品目録(1895-1919)『日中韓近代初期文学の関連様相研究——明治小説の伝播と受容を中心に』神戸大学博士論文2019.3.25 電字版
- DADUI YAO (姚達兌) ○SHAKESPEARE IN CHINESE AS CHRISTIAN LITERATURE: ISAAC MASON AND HA ZHIDAO'S TRANSLATION OF TALES FROM SHAKESPEARE “RELIGIONS”10-8. 2019.7.26
- 劉建軍總主編、袁先來著○『百年來歐美文学“中国化”進程研究』第2卷(1840-1919) 北

京大学出版社2020.10

- 湯哲声、張蕾主編『中国現当代通俗文学研究論集』蘇州大学出版社2020.9
- 湯哲声「披沙瀝金、扎实的先行(代前言)——蘇州大学中国現当代通俗文学研究團隊介紹」、
- 范伯群「《海上花列伝》: 現代通俗小説開山之作」、
- 范伯群「1921-1923: 中国雅俗文壇的分道揚鑣与各得其所」、
- 范伯群「超越雅俗 融会中西——論20世紀40年新新市民小説代表作家的創作經驗」、
- 范伯群「黑幕徵答・黑幕小説・揭黑運動」、
- 徐斯年「《倚天屠龍記》与《鶴驚昆侖》之比較——兼及“現代文学史觀”」、
- 徐斯年「向愷然的“現代武侠伝奇話語”」、
- 徐斯年「修仙者的愛——《蜀山劍俠伝》里的“情孽”」、
- 曹惠民「多元共生的現代中華文学」、
- 曹惠民「“金庸現象”更值得探討」、
- 湯哲声「何謂通俗: “中国現当代通俗文学”概念的解構与辨析」、
- 湯哲声「如何評估: 中国現当代通俗文学批評標準的建構和價值評析」、
- 湯哲声「歴史与記憶: 中国吳語小説論」、
- 陳小明「通俗文学・市民社会・現代性」、
- 房 偉「個人主義、穿越史觀与共同体誘惑——論“網絡穿越歴史小説”的“三宗罪”」、
- 房 偉「在多元類型發展中走向成熟——評2011年的中国網絡文学」、
- 張 蕾「論“故事集綴”型章回体小説」、
- 張 蕾「稗史何妨虛文——現代通俗小説对衣食住行的社会解讀」、
- 錢繼雲「論胡懷琛的《大江集》及其詩歌理論」、
- 錢繼雲「胡懷琛与《嘗試集》的論争」、
- 吉 旭「還珠樓主武侠小説研究述評」、
- 張学謙「被割裂的“雅”与“俗”——觀念史視域中的“網絡文学”」、
- 張学謙「意義与方法: 中国現代通俗文学的学术史意義再呈現——評《民国文化与文学研究文叢(第9編)・蘇州大学特輯》」、
- 張 蕾「後記」